

JIC インフォメーション

第224号 2023 年 4 月 10 日
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NSビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真は、本紙記事より抜粋

《特集》 ウクライナ戦争下のロシアビジネス、ロシア交流

ロシア雑貨からユーラシア雑貨へ

……白井 健一 (ツバサ取引インターナショナル) ……2P

美しき春を呼ぶ! 第25回はこだてロシアまつり

……大渡 涼子 (ロシア極東連邦総合大学函館校) ……3P

日ロ人的交流の現状~ウクライナ戦争下の旅行・留学

……伏田 昌義 (JIC 旅行センター) ……5P

《日ロ交流情報》 日ロ友好愛知の会の「歌声ランチ」、など…7P

《連載コラム》 こんな時代にロシア語のすすめ

「誰が美人かは自分で決める」…黒田 龍之助…8P

《本の紹介》

「ロシアからブロードウェイへ オスカ俳優ユル・ブリンナー一家の旅路」(ロック・ブリンナー著、榎本真奈美訳) ……9P

《講演録》 大阪日ロ協会講演会

「シベリア抑留問題、その歴史とこれまでの取り組み」

……有光 健 (シベリア抑留者支援・記録センター) ……12P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ウクライナ戦争が始まって 400 日が過ぎました。どんな言い分があるにせよ、いきなり軍事侵攻したロシアに非難が集まるのは当然です。日本社会で「ロシア嫌い」が広がる中、これまでごく普通に行われてきたロシア関係の交流やイベントは、非常にやりにくい状態が続いています。

そんな中でも各地のロシア関係者は、日ロ交流の糸口を絶やさない、あれこれ知恵を絞って頑張っています。新潟のツバサ交易インターナショナル・白井健一さんとロシア極東連邦総合大学函館校・大渡涼子さんに寄稿いただきました。(編集部)



写真: イオンモール新潟南での「ユーラシア雑貨展」

ウクライナ戦争下のロシアビジネス、ロシア交流 ロシア雑貨からユーラシア雑貨へ

白井 健一 (ツバサ交易インターナショナル 代表取締役)

1990 年から 1991 年にかけて JIC で当時のレニングラード国立大学に 10 か月間ロシア語研修留学して早や 33 年。就職もロシア・ソ連関係の会社だったので、考えてみれば学生時代から常に「ロシア」とのことに携わってきました。「新潟ロシア村」で文化関係を、「ユーラシア投資環境整備」で経済関係を学び、2011 年に新潟で自分の小さな会社「ツバサ交易インターナショナル」を設立し、ロシアビジネスの仕事に身を置いてきました。

ロシア雑貨・民芸品の輸入販売がメイン事業

ツバサ交易ではこれまで、ロシア向けの輸出も少しありましたが、どちらかというと輸入の方が多く、ロシアから民芸品や雑貨、チャーガ(カバノアナタケ/白樺茸)、蜂蜜、食品加工機械などを輸入し、国内で販売(卸・小売)することがメイン事業となっています。

会社設立当初は、輸入商品の業者向け卸販売がほとんどでしたが、途中からイベントや催事に出店し消費者に直接販売することを始めました。ここ 8 年ほど北海道から沖縄まで国内各地の百貨店など商業施設で催事出店し、ロシアから輸入した民芸品や雑貨、食品を販売しています。

「銀行送金ができない」...ビジネス環境が激変

そんな中、昨年 2 月にロシアのウクライナ侵攻が始まり、日ロ間のビジネス環境は激変しました。その数年前から始まったコロナ禍でも非常に厳しい状況に陥っていましたが、ウクライナ戦争がもたらしたビジネス環境のマイナスはコロナ禍の比ではありませんでした。

まずウクライナ情勢に起因する国際的な経済制裁のため、ロシア向けの海外送金が難しくなり、商品の調達が困難になりました。制裁対象から外れたロシアの地方銀行向け送金でも、ヨーロッパの経由銀行で 3 か月待たされ、結局日本に戻されたこともありました。その後経由銀行を替えたり、ロシア側で別の銀行に口座開設してもらったりと手を尽くし、よ

うやく何社かのロシア側企業とは銀行送金による決済手段を確保したという状況です。ロシア側個人向けの送金はいまだにできていません。

直行便がなくなり輸送費が高額に

次に、同じく経済制裁の影響として、航空貨物の日ロ間直行便がなくなったことで、中東やトルコ経由での商品輸送となり、輸送費が大変高額なものになりました。大幅な円安も追い打ちをかけ、ロシアから輸入する商品は非常に高額なものとなり、国内で販売しづらい状況が生まれ、それは今も続いています。

蛇足ですが、今年に入ってからウラジオストク港出しのコンテナ船でチャーガを輸入しました。海上輸送そのものは順調でしたが、日本の港での通関関係の諸々のチェックが以前より厳しくなったように思います。輸入許可が出るまでかなり時間がかかりました。

ロシアイメージの悪化で厳しくなった催事販売

さらに周知のとおり、ロシア・ウクライナ戦争はテレビやインターネットなどで連日報道され、ロシアに対する日本人のイメージや感情は極端に悪化。そんな中でロシアのモノを国内で販売することは、なかなか厳しいものとなっています。とくに百貨店など商業施設での催事販売では不特定多数の消費者に対する対面販売のため、通りすがりのお客様を含め様々なお客様からいろんな声が聞こえてきます。中には同情的なお客様も少なからずいらっしゃいますが、皮肉や非難に近い声も結構聞こえてきます。

昨年は予定していた商業施設での出店自体が 20 件ほど中止になり、催事販売が全体売上の大きな比率を占めるようになった我々の小さな会社にとって、存続にかかわる最悪な状況となってしまっています。

「ユーラシア雑貨」へと形を変えて販売続行

このような逆風のなか、催事出店について一部商業施設か

ら、ロシア商品の比率を下げロシア色を薄めて、他の国々の商品を含めて販売するのであれば出店しても構わないという話が出てきました。それを受けて昨年 11 月以降、それまでの「マトリョーシカ&ロシア雑貨」催事から、他のヨーロッパ・アジア諸国の商品も加えて、「ユーラシア雑貨」に形を変え、催事展開することにしました。

形を変えといっても簡単なことではありません。これまでロシアものしか取り扱ってこなかったため、他の国々の商品を調達するといってもすぐには無理があります。オーストリアやウズベキスタンなど一部の国については自社直輸入としましたが、それ以外の国々の商品については、それぞれの国を専門とする国内の業者様にご協力をいただきながら催事ブースを組んでいるのが今の実情です。ご協力をいただいている業者の皆様には本当に感謝しております。

改めてロシアものの素晴らしさを再認識

ロシアをビジネス対象とする地方の小さな会社のウクライナ侵攻以降の変化について書いてきました。会社を維持するため、つまりは自分たちが生きていくために、「ロシア」から「ユーラシア」への変化を余儀なくされた 1 年でしたが、ロシア以外の地域の商品も素晴らしいと感じつつ、同時にロシアものの魅力を改めて感じてきた 1 年でもありました。20 代のころ勤めていたテーマパーク「新潟ロシア村」のキャッチフレーズで、いまだに心に強く残っている言葉があります。『ロシアに恋したものは二度と離れられない』ヨーロッパやアジアの国々の文化・伝統を自分なりに再発見しつつも、ロシア文化の素晴らしさを再認識し、おそらくもう自分の残りの人生でロシアが無関係になることはあり得ないだろうと思っています。

いつの日か「ロシア雑貨」ののぼりを再び

戦争は破壊と悲しみ、憎しみ、苦しみなど負の感情や事象しか生みません。とにかく彼の地で早く停戦が成立し、平和になってほしいと切に願っています。政治のことはよく分かりませんが、今の戦争状態が永遠に続くことはあり得ません。停戦が成立しても、ウクライナの戦後復興にはかなり時間がかかるでしょうし、日本人のロシアに対する感情や心理、イメージが改善されるにもかなりの時間がかかるかもしれません。それでもまず第一歩は停戦しかないと思います。

いずれ逆風が順風となり、催事出店する際にも堂々と「ロシア雑貨」ののぼりを再び立てられる日が早く訪れることを祈念しています。

「ユーラシア雑貨フェア」開催スケジュール (予定)

【千葉】4/8～17 イオンモール船橋

https://www.aeon.jp/sc/funabashi/event/event_e12207_as.html

【福島】4/29～5/8 フェスタ郡山

【千葉】5/13～22 イオンモール成田

【徳島】6/3～8 徳島アミコ

【埼玉】6/17～26 イオンモール羽生

株式会社ツバサ交易インターナショナル【ミーラチカ】

Tsubasa Trading International Co., Ltd. (TTI) 【МИЛЮЧКА】

URL: <http://www.tsubasa-ti.co.jp/> <http://russia-tsubasa.ocnk.net/>



大渡 涼子 (ロシア極東連邦総合大学函館校 事務局長)

「美しき春を呼ぶ!」をテーマに、ロシア極東連邦総合大学函館校では、2月11日(土・祝)に第25回はこだてロシアまつりを開催しました。このまつりは、単なる学園祭という位置付けではなく、市民のみなさまに函館校とロシアを知り、親しみを持っていただきたいという願いから始まったもので、その期待通り来場者は若者よりもむしろ高齢者や家族連れが目立ち、リピーターが多いのも特徴です。

来場者のお目当ては、学生がロシア人教員とともに作る本場のロシア料理を提供するカフェや、マトリョーシカなど民芸品を販売するキオスクですが、ほかにも民族衣装を着て写真を撮るコーナー、はじめてのロシア語教室、チェス、学生による体験発表、ロシアの専門家を招いての講演会、時には人形劇、さらには函館校の看板コーラスグループ「コール八幡坂」のコンサートなど、毎年多彩なメニューで行って来ました。

25 回の歴史を刻む～2013 年から「春を呼ぶ」まつりに

1998 年に第 1 回を開催したころは、11 月に実施していました。ちょうどウラジオストク本学で日本語を学ぶロシア人学生が函館校に留学している時期だったため、留学生とともに準備ができたのです。

2008～2012 年の間は夏の屋外開催とし、駐車場にテントを並べ、北海道の開放的な空気の中、シャシリク屋台を出したり冷たいボルシチを提供したこともありました。

2013 年からは 2 月開催とし、マースレニツァと同時に行っています。

マースレニツァは冬を払い、春を呼ぶ、ロシアの土着の伝統儀式です。冬を表す体長 2 メートルほどの藁人形「モレーナ」を燃やし、太陽を模した丸いクレープ・ブリヌイを食べるのが習わしですが、函館校のそれにはオリジナルの寸劇やコール八幡坂の合唱などが加えられ、20 分ほどのイベント

となります。

モレーナは 2 月に入ると、ロシア人教員の指導の下、毎年 1 年生が中心となって製作されます。稲わらを束ね、その束を荒縄でつなげ、竹で作った骨組みに巻き付けていきます。作業開始から 3〜4 日で完成しますが、函館校のモレーナには最後に「冬」と書かれた紙のエプロンがつけられます。モレーナに火がくべられる前には、糸偏を書き足し、「終」にします。これで寒かった冬も「お終い」、モレーナは炎に包まれ、3 分ほどで燃え尽き、観客は拍手で春の到来を喜びます。

ウクライナ戦争でのいわれない非難

昨年と一昨年はコロナ禍のため、大勢の人が一度に集まること、飲食や合唱に制限が加えられました。それでも何とかロシアまつりの伝統をつなごうと、この 2 年間は屋外でのマースレニツァのみ開催してきました。そして、昨年 2 月 24 日に始まったロシアによるウクライナ侵攻。私たちを取り巻く状況は最悪のものとなり、ロシアに対する恐怖心から、学校にも非難の電話やメールが相次ぎました。ただ純粋に、ロシアの文化や歴史に興味を持ち、隣の国の言葉を学んでいるだけなのに。“ロシアのスパイを養成する学校”、“函館から今すぐ立ち退け”、いわれない誹謗中傷に学生もロシア人教員たちも心を痛めました。この状況で今年のロシアまつりをどのように開催するか悩みましたが、今年開催しなければ、フル開催のロシアまつりを知っている 4 年生が卒業してしまい、その伝統が途切れてしまう危機にありました。なんとか伝統を後輩たちにつなぎたかったのです。



留学中のロシア人学生も協力

コロナ前の規模に近づけてやろう、そのために知恵を絞ろう。そう決心して年明けから準備に入りました。カフェは「ロールキャベツとリングピロシキ、スープのセット」のテイクアウトとピロシキ単品販売のみ。通常 4 時間開催しているまつりも今回は 2 時間半に短縮しました。午前中は屋外駐車場でマースレニツァ、カフェとキオスク、午後は校舎内で民族衣装試着、ロシア語教室、キリル文字で名前を書き缶バッジを作るコーナー、クイズに挑戦、チェス、学生発表、合唱コンサートと、午前午後で会場を分けたため、学生は少なくとも 2 つの係を掛け持ちし、お客様が 2 時間半の間にすべてのプログラムを楽しめるよう、凝縮しました。

函館市内の日本語学校に留学しているハバロフスクやサンクトペテルブルグから来たロシア人学生も手伝い、現場を盛り上げてくれました。閉鎖された世の中で、彼らもこのようなイベントを待っていたのです。

「手応えあり！」函館市民の反応は上々

準備をはじめ、街中にロシアまつりのポスターが貼られ、新聞で告知されると、市民からの問い合わせが寄せられました。ピロシキは買えますか？キオスクはやりますか？私たちは手ごたえを感じました。市民のみなさまも、ロシアまつりを心待ちにしてくれている！

当日、ロシアに対する悪感情から、いつものようにお客様が来てくれるか、また変な嫌がらせがないかなど懸念はありましたが、開場前から多くの市民のみなさまが待っていました。例年以上に、市内は元より京都や東京、札幌からも卒業生が参加してくれ、この 4 月から入学予定の新入生の顔も多くみられました。

どの人も屋外でマースレニツァを見て、午後からは校舎内でのプログラムを楽しまれた様子です。燃え盛るモレーナの火にあたりながら、「これがなければ春は始まらない」といった声をいくつも耳にしました。25 回続けてきたこのまつりは、確実に函館市民に受け入れられている、そう強く感じました。

例年以上に積雪が多く、寒さが厳しかった函館ですが、みんなが待ち望む「美しき春」はすぐそこまで来ていると信じています。(以上)

ロシア極東連邦総合大学函館校について

1994 年開校。ウラジオストクの極東連邦大学の分校で、日本で唯一のロシアの大学の分校である。ロシア地域学科（4 年制）とロシア語科（2 年制）があり、ロシア地域学科を卒業するとロシア極東連邦大学の卒業資格と学士号が授与される。

ウラジオストク本校から派遣されたロシア人教授を中心に独自の教授法とカリキュラムで、実用的なロシア語とロシア文化・経済等の幅広い専門知識の習得を目指す。卒業までに 2 年制は、ロシア教育科学省認定の「ロシア語検定試験（ТРКИ）」の第 1 レベル以上の合格を、4 年制は第 2 レベル以上の合格を目標に掲げている。ロシア地域学科の学生は 3 年次に 3 か月間、ロシア語科は 2 年次に 1 か月間、ウラジオストク本校附属「ロシア語文化センター」へ語学留学することになっている。

ウクライナ戦争で直行便が飛ばなくなり、ウラジオストクへの留学は中止を余儀なくされたが、行き先をキルギス国際大学に変更して継続している。市民向けロシア語講座も開設しており、「どんな状況でも学生や市民の学習意欲に応えたい」と頑張っている。(この項、編集部)

日ロ人的交流の現状

ウクライナ戦争下の旅行・留学

ウクライナ戦争は、ロシア旅行業界にも深刻な影響を及ぼしています。

2020 年 2 月に始まったコロナ禍で丸 2 年間、旅行需要が例年の十分の一以下に落ち込み、ようやくコロナ明けが近づいて水際対策緩和へと動き始めた矢先に起こったロシアの軍事侵攻。ロシア・旧ソ連地域を専門とする旅行社にとっては致命的ダメージです。「これでまた需要回復が遠退いた」、「プーチン大統領、なんてことしてくれるんや!」と暗澹たる気分が襲われたものでした。

軍事侵攻を受けて、米国・EU・日本など西側諸国は強力な対ロシア経済制裁を発動しました。旅行業界にとって一番影響があったのは、金融制裁（ロシアの銀行を SWIFT から排除）と EU 諸国の通航制限です。EU がロシアへの航空機乗り入れを停止し、ロシアが保有する航空機のリース契約を打ち切ったため直行便が飛ばなくなり、銀行送金やカード決済ができないため渡航者の滞在もきわめて不便になり、ロシア渡航に大きな支障をきたすことになりました。

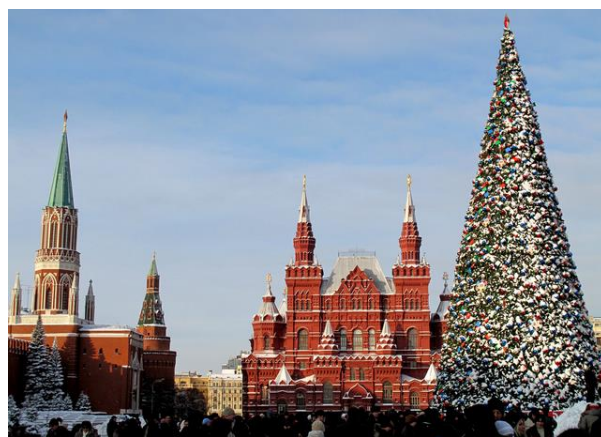
以来、「ロシアって、今行くことができるんですか?」という問い合わせが、JIC 旅行センターにもよく入るようになりました。

日ロ往来は完全に閉ざされているわけではない

ここでまず言っておきたいことは、「日ロの往来は完全に閉ざされているわけではない」ということです。日本は対ロシア経済制裁に加わっていますし、それに対してロシアは日本を「非友好国」に指定しているわけですが、しかし、だからと言ってお互いに「渡航禁止」としているわけではありません。日本側・ロシア側ともに、観光・留学・商用等の査証（ビザ）は通常通り発給されています。

日本外務省はロシアを「海外危険情報」レベル 3（渡航中止勧告）に指定していますが、これは法的拘束力のない勧告であって、個人の責任で渡航する人を強制的に差し止めるものではありません。旅行業界の慣例では、レベル 3 ではパッケージツアー（旅行社主催の団体旅行）は組むことができないが、個人旅行や業務出張などの手配旅行には対応するということになっています。したがって、ロシアへの渡航は原理的には可能です。

ただし、渡航ルートが限られていること、石油価格の上昇で航空運賃が値上がりし、また現地でのカード決済ができないことなどで、ロシア渡航がすごく不便になったことは事実



モスクワ、クレムリンのクリスマスツリー

です。

日ロ間の航空ルート～直行便が無くなった!

現在、日本・ロシア間の航空ルートには次のようなものがあります。

＜モスクワ・ペテルブルグ方面＞

- ①中東経由航空便...EK エミレーツ航空(ドバイ経由)、EY エティハド航空(アブダビ経由)、QR カタール航空(ドーハ経由)、TK トルコ航空(イスタンブール経由)／片道 25～26 時間
- ②ヘルシンキ経由航空便＋陸路（高速バス）...AY フィンランド航空、JL 日本航空／ヘルシンキーペテルブルグ間は高速バス／片道 25～26 時間
- ③タシケント経由航空便...HY ウズベキスタン航空／片道 13 時間／週 1 便
- ④バンコク経由航空便...日本 - バンコクは TG タイ航空、JL 日本航空など。タイ - モスクワは SU ロシア航空／片道 18～20 時間

＜極東方面＞

- ⑤モンゴル経由航空便...OM モンゴル航空、JU アエロモンゴリア／ウランバートル、イルクーツクまたはウランウデ経由→極東の諸都市
- ⑥モンゴル経由航空便...MR フンヌ航空／成田ーウランバートルーハバロフスク／週 1 便

現状では、日本に一番近い極東のウラジオストクやハバロフスクに行くルートが非常に限られており、時間もかかる状態です。直行便なら 2 時間で行けるのに、今は 1 日かかり。乗り継ぎが悪いともっと時間がかかります。

今年の春から中国ーロシア間で、ウラジオストクー北京、ハバロフスクーハルビンなどの航空便が飛び始めており、中国経由便が使えるようになればかなり便利になります。しかし、日本から行く場合、中国に一度入国してから乗り換えとなるため、ゼロコロナ政策の影響で中国政府が日本人のビザ発給に制限をかけている現状ではまだしばらくこのルートは実用的ではありません。

ロシア渡航～一般的な観光旅行はまだ先の話

したがって、日ロ人的交流の現状と言えることは、アウトバウンド（日本人のロシア渡航）に関しては、まだ一般的な観光旅行は成立せず、留学やビジネス渡航など、「どうしても行きたい人」「どうしても行かなければならない人」だけが、ロシアに出かけているということです。

実際、昨年 2022 年に JIC 旅行センターが取り扱ったアウトバウンド客数は 208 名で、これは 2019 年以前の集客数のわずか 7%でした。

このうちロシア語留学は 33 名（長期 19 名、短期 14 名）。10 か月間の長期留学の場合、受入先の大学はモスクワ大学 6 名、サンクトペテルブルグ大学 1 名、ウラル連邦大学 2 名、ミンスク言語大学 2 名、カザフ国立大学 7 名、リガ語学学校 1 名という内訳です。日本に一番近いウラジオストクの極東連邦大学が航空アクセスの不便でゼロになり、代わりにロシア以外の留学先として中央アジアのカザフスタン、バルトのリガが新たに登場したという結果です。

ロシア語留学は死なず！

コロナ前までは長期留学生を年間 50～60 名を送り出していましたから、本格回復にはまだほど遠い現状ですが、しかし、ロシア語留学の希望者はコロナがあっても戦争があっても必ずいるし、JIC はそれに応じてロシア語留学事業をこれまで同様継続していく決意でいます。「ロシア語留学は死なず！」です。

帝国データバンクによると、22 年 2 月時点でロシア進出日本企業は 347 社。2000 人以上の在留邦人がロシアに長期滞在していました。ウクライナ戦争が始まり、かなりの日本企業が事業停止ないし撤退し、この 1 年間でロシア在留邦人の数は 700 名程度に減りましたが、それでもビジネス目的や学術交流で日ロ間を往来する人は消えてなくなることはないと言っています。

留学とビジネス渡航を中心にロシアへの旅行業務を継続しつつ、バルト諸国や中央アジア、モンゴルなどの観光ツアーにも手を広げていくというのが、現在の JIC 旅行センターの生き残り戦略です。

ロシアからの訪日観光客は増加中

一方、インバウンド（ロシア人の訪日旅行）について言えば、水際対策が大幅に緩和された昨年 10 月以降、徐々に回復の兆しが現れています。JIC が取り扱ったインバウンド客数は 22 年 130 人とコロナ前の 10%に満たない数字でしたが、それでもほぼゼロだった 21 年よりはるかにマシです。訪日旅行のハイシーズンは 3～4 月の桜の季節と 10～11 月の紅葉の季節。今年の前半だけで昨年 1 年間の実績を超える集客をすでに見込んでおり、インバウンドのさらなる回復が期待されます。



東京の街角にて(訪日旅行者)

アウトバウンドと違い、インバウンドのロシア人客の大半は観光目的で来日しています。もちろん商用や留学目的の来日もありますが、圧倒的多数は観光客です。ウクライナで戦争をやっている、経済制裁で不自由している、どんな状況でも機会さえあればバカンスを楽しみたいのが「ロシア流」なんですね。タイのプーケットでは、昨年 12 月に訪れた外国人観光客の半分以上がロシア人だったという話があります。ウクライナ戦争で厳しい非難の声を上げているヨーロッパや北アメリカに行くのは気が引けるけれど、欧米とロシアの間で等距離の姿勢をとっているアジア・アフリカ諸国へは多くのロシア人観光客が出かけているようです。この流れで訪日ロシア人客も今後さらに増えていくことが予想されます。

「ロシア専門旅行社」の旗は降ろさず！

5 月 8 日から日本の水際策はすべて撤廃され、コロナ前の状態に戻ります。ウクライナ戦争の停戦が成ったとしても、対ロ制裁はまだ続くでしょうし、日本社会に植え付けられた「ロシア嫌い」も残るでしょうから、旅行・観光業を含めたロシアとのビジネス関係は長く困難な道が続くと予想されます。しかし、ビジネスのみならずロシア語、ロシア文化（音楽、バレエ、芸術）、学術交流など、日本社会には根強い「ロシア需要」が存在していることも事実です。困難はあっても私たちは日ロの人的交流を維持し続けるために、「ロシア専門」の旗を掲げ続けたいと思います。

それにしても、戦争は旅行・観光産業にとって最大の敵です。戦争は国土や文化財を破壊し人々の命を奪うだけでなく、人々の心を破壊します。憎悪が異文化への寛容や未知の世界への好奇心を押つぶし、世界をバラバラにしてしまうことを恐れます。

一日も早く停戦・和平が進み、多くの日本人がロシアを訪れ、また多くのロシア人が日本を訪れる日が来ることを祈っています。

(伏田昌義／ジェーアイシー旅行センター株式会社)

<日口交流情報>



日口友好愛知の会が「歌声ランチ」 ウクライナ音楽家協会・高谷光信さん の指揮で(2 月 25 日)

2 月 25 日、名古屋市内のホテルで、日口友好愛知の会の「歌声-うたごえ-ランチ」が開催されました。

ウクライナと日本で活躍中の指揮者高谷光信さんと名古屋市内で活動中の Musik Engel 合唱団フレンズの皆さんの演奏で、日本の歌（村祭、朧月夜）やロシアの歌（バイカル湖のほとり、ともしび、赤いサラファンなど）の合唱曲を楽しみました。演奏の合間には、高谷光信さんの音楽の話が入り、ウクライナの戦争が一日も早く終結することを祈りつつ、しかしロシアの素晴らしい音楽や芸術文化を排除してはならないこと、芸術を楽しむ心から本当の平和が生まれることなどが力強く語られました。



大阪日口協会が総会と講演会を開催 「シベリア抑留問題、その歴史とこれまでの取り組み」(2 月 12 日)

2 月 12 日、大阪日口協会の定期総会と講演会が大阪市内で開催されました（オンライン併用）。総会では、ウクライナ戦争の停戦と平和回復がなされるまでは通常の日口交流イベントは組めないものの、日口関係やウクライナ戦争について

様々な情報発信を続けていくことが確認されました。

総会後の講演会では、シベリア抑留者支援・記録センターの有光健氏が「シベリア抑留問題、その歴史とこれまでの取り組み」と題して講演しました。ソ連・スターリンの秘密指令で始まったシベリア抑留の歴史経過、同じ戦時捕虜でも南方戦線とは違ったシベリア抑留の特質、帰還後の抑留者を待ち受けた日本社会の冷たい仕打ち、国家補償をもとめて抑留被害者が勝ち取った「戦後強制抑留者特別措置法」の成果と今後の課題など、有光氏の講演はこの問題の全体像がとてよくわかる内容で、大変勉強になりました。

（本紙 12 頁以下に有光氏の講演録を掲載しています。是非ご一読ください）。



日口協会が「親睦の集い 2023 春」 平和回復願い、坂本里沙子さんの ピアノサイタル(2 月 17 日)

「平和回復への願い 思いを分かち合う」と題して、日口協会（高村正彦会長）の「親睦の集い 2023 春」が 2 月 17 日、東京千代田区の紀尾井町サロンホールで約 30 名の参加者を集めて開催されました。

「集い」では、高校卒業後ロシア国立モスクワ音楽院へ留学し（2012 年～19 年）、リガ国際コンクールなど国内外のコンクールで数々の受賞をしているピアニスト坂本里沙子さんが、ラフマニノフやチャイコフスキーの作品を演奏。すぐ間近で聞くプロフェッショナルなピアノ演奏は迫力いっぱい、参加者を魅了しました。

コンサート後の親睦会は、コロナ禍とウクライナ戦争で長らく顔を合わせる事ができなかった会員同士の久しぶりの集まりとなり、好評でした。

なお、坂本里沙子さんがモスクワ留学中に綴ったブログをまとめた本「私の音楽留学」が群像社から出版されています。

「私の音楽留学」

坂本里沙子著、群像社ユーラシア文庫 17 定価；900 円＋税

→ 群像社 <http://www.gunzosha.com/>

こんな時代にロシア語のすすめ 第 3 回

「誰が美人かは自分で決める」

黒田 龍之助

アゼンがロシア語を選んだ理由は、「ロシア人は美人だから」でした。

わたしが勤める外国語大学は、第 2 外国語が 12 言語から選べるほどの充実ぶりです。でもそうなりますと、多くの学生はメジャーな外国語やイメージのよい外国語を目指し、ロシア語のような「マイナー言語」はなかなか選んでくれません。

そんな中、アゼンは 1 年生からロシア語を選びました。花粉症ぎみの彼なので、4 月はほとんどマスク姿だったのですが、y は唇を突き出して発音しようというのと、一生懸命に突き出すので、マスクの真ん中がすこし盛り上がるほどでした。

ちなみに、なぜアゼンと呼ばれているかといえば、本当はサーシャというロシア名をつけたのですが、ロシア語中級クラスに上がったと、他にもサーシャがいたからです。ボクが最初のサーシャなんだから、『サーシャ 1 号』Саха номер один ですよ、ということだったのですが、結果的にはサーシャが消えて、ただのアゼンになりました。

さて、文字と発音が終ると、さまざまな表現が出てきます。アゼンはあいさつ表現や、名前を尋ねる表現に対してとくに熱心でした。そのうち、授業後は積極的に質問をしてくるようになります。

「君かわいいね」って何ていうんですか。

どうやら将来、ロシア美人と会ったときの準備をしているようです。ちょうどいいので、ロシア語における「あなた」ВЫ と「君」ТЫ の違いや、主語の性に合わせて形容詞のかたちを変えることなどを説明します。

「それ似合うね」って何ていうんですか。

そうねえ、「それ」が何かにもよるんだけど、たとえばこんな表現が使えるよ……。こんな感じで、アゼンは楽しそうにロシア語を学んでいました。

ロシア人は美人。それが真実かどうかはわかりません。そもそも美の基準なんて個人差の激しいもの。誰が美人かは自分で決める。異論は受け付けません。ついですが、ここでは「美人」という日本語を「美しい人」という意味で使っているの、男女は問いません。

かくいうわたしも、ロシア人を眺めていますと美人だなと感じます。ソビエト時代、入国審査の係官が男女を問わず俳優みたいにカッコいい人が多いのは、実は政府が対外的に好



印象を与えるためだという噂がありました。真偽のほどは不明ですが、整った顔の男女が真剣な眼差しでわたしのパスポートを見つめる姿は、威厳があつてちょっと怖かったです。

もちろん、親しみやすい美人もいます。写真は団体旅行で出会ったレニングラードの日本語通訳ガイド。確かまだ学生さんで、研修も兼ねていたと思います。30 年以上前のものですが、隣にいる若き日のわたしは明らかにニヤケています。すみません、今も昔も正直なんで、気持ちが顔に現れるのです。彼女の場合は、美人というよりかわいい感じですが、アゼンの好みとも一致します。

とはいえ、美人は目鼻立ちではありません。なんといいですか、人間は表情が大切ですよ。嬉しいことに、わたしが旧ソ連・ロシアで出会った人々は、みんな表情が明るかったです。

なぜか。

それはもちろん、わたしがロシア語を話すからです。

ロシア語は国連の公用語であり、世界で広く学ばれている言語ではありますが、使用地域が限られています。だからこそ、あきらかに外国人であるわたしがロシア語を話せば、ロシア人は女性も男性も、老いも若きも全員が喜んでくれました。その喜びに満ちた顔は、誰もが美しいのです。

それだけではありません。わたしにはロシア人の「表情」がわかるのです。

あるとき友人の下宿でテレビを見ていました。大学卒業した頃の頃です。たしかバレーボールの試合で旧ソ連と中国が対戦していたと思います。ソ連側のアタックが決まり、選手たちが盛り上がっている姿を眺めながら、友人がいました。

どうしてロシア人って嬉しそうな顔しないの？

わたしはビックリしました。だって、画面の中のロシア人選手たちは、みんな嬉しそうな顔をしているんです。喜んでるに決まってるじゃない！

ところが友人によれば、そうは見えないらしく、皆なんだか沈んだ表情だということです。

わたしは反論しました。そんなことはない。対戦相手の中国人より、よっぽど表情豊かだよ。彼らこそアタックが決まっても、つまらなそうな顔じゃないか。

すると友人は驚いていました。

なににってんの。中国人たちは誰もが嬉しそうじゃん！

実は友人は日本語教師で、中国人の生徒とふだんから接していました。なるほど。つまり表情というものは、こちらが学習しなければわからないのです。相手を知らうと努力を重ねてはじめて、嬉しいか悲しいかがわかるようになる。そんなことに気づきました。

一般にロシア人は表情がわかりにくいといわれます。目鼻立ちが美しいからこそ、なにやら素振りが冷たい印象を与えるらしいのです。さらにソビエト期は、閉鎖的な社会体制のため愛想のよくない人が多かったかもしれません。時代が変わっても、それを引きずっている人もいます。こうなると、いくら美人でもなんだかイヤな感じですよ。

その解決方法を、あるとき現代ロシア文学の先生から習いました。

たとえばロシアに行って、ホテルに泊まるとします。そこにはフロント係、あるいはレストランのウェイトレス、さらには掃除のおばさんまでさまざまな人が働いています。そういう人にはなるべく話しかけ、相手の名前を聞き出す。ナターシャとかレーナとか、名前だけで充分。そして必ず覚えておくのです。

そして翌日、朝食のときにナターシャを見かけたら、遠くからでも声をかけます。

ナターシャさん、おはようございます！

相手は意外そうな顔をするかもしれません。しかし気にしてはいけません。たとえ無視されても、これを繰り返します。昼に会ったらこんにちは。晩に会ったらこんばんは。そのときは忘れずにナターシャと呼びかけること。

これで相手の態度がガラリと変わると、その現代ロシア文学の先生はいうのです。

ものは試しと実行してみれば、ア〜ラ不思議。ナターシャの表情は見る見る優しく美しくなり、こちらに微笑みかけ、しまいには向こうから話しかけるようにさえたのです。

考えてみれば、これは当たり前ですよ。きちんとあいさつすること、相手の名前を覚えることは、コミュニケーションの基本です。積極的に声をかけることもなく、表情に乏しいとか愛想が悪いとかいっているだけでは、相手の気持ちを掴みません。

あいさつ表現を覚え、相手に名前を聞き、だんだんと親しくなれば「君かわいいね」、さらには「それ似合ってるね」

……。

つまりアザンなんです！

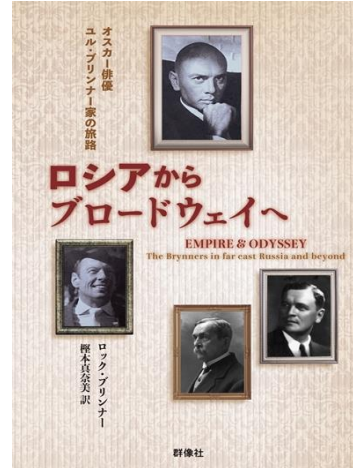
美人に微笑みかけてほしいければ、こちらからあいさつすること。そのためにはロシア語をしっかり勉強する。うん、これだ。

いよいよ新学期。今年もアザンのように、美しいロシア人と仲良くなることを目指してロシア語を履修する学生が、たくさん集まることを期待しています。

本の紹介

「ロシアからブロードウェイへ」

オスカー俳優ユル・ブリナー家の旅路



ロック・ブリナー著

樫本真奈美訳

群像社／四六判 432 頁

定価：3200 円＋税

ロシア関係の書籍を専門に出版している群像社から面白い本が出た。ミュージカル「王様と私」で一世を風靡したオスカー俳優ユル・ブリナーがロシアの

ウラジオストク生れだということはご存じだろうか。

ユル・ブリナーの祖父ユリウス・ブリナーはスイスで生れ、中国・上海に渡り、幕末・明治初期の日本（横浜、長崎）とウラジオストクを結ぶ海運事業に従事し、やがて「ブリナー商会」を創設して極東ロシアの実業家になった。その息子ボリス・ブリナーはユリウスの興した海運・貿易・鉱山事業を発展させ、ロシア革命後も 1930 年代初めまでソビエト政権と難しい折衝を繰り返しつつ極東ロシアに留まり、やがて命からがらソ連を脱出した。1920 年にウラジオストクで生れたユルは母とともに中国ハルビンからパリ、ニューヨークへと渡り、サーカス芸人、舞台俳優、映画俳優として成功を収め大スターとなった。本書は、ユルの息子ロック・ブリナーの手になる「ブリナー家四代記」である。

著者ロック・ブリナー（Rock Brynner／1946 年生れ）は、ダブリン（アイルランド）のトリニティ・カレッジ哲学科を出て、米コロンビア大学で歴史学博士号を取得しており、父の栄光に頼ることなく演劇や音楽、実業の世界で様々な体験を重ねた。本書はブリナー家四代の遍歴を縦糸に、1860 年代から 2000 年代初頭にいたる 150 年間の近現代史を描いた歴史読み物である。

一読して筆者が興味を引かれたのは、1860 年の北京条約でロシア領となった沿海地方で港湾都市ウラジオストクが建設され発展していく過程とユリウス・ブリナーの実業家としての成長発展が重なり、さらにロシア革命後、ロシア帝国→極東共和国→ソ連邦へと変遷する時代の激流に極東随一を誇ったブリナー商会の事業が翻弄され、ボリス・ブリナーとその息子ユル・ブリナーの運命が目まぐるしく変転していく、その歴史と個人の偶然性に満ちた出来事の数々である。ここにウラジオストクを中心とするロシア極東の近現代史の一断

面が立体的に浮かび上がる。

著者の歴史学者らしい丁寧な調査に基づく記述と、訳者のこなれた訳文さらに日本での追加的な調査による補足が、本書を歴史書であると同時にすぐれたドキュメンタリー作品に仕上げている。(F)

* * *

以下、「ロシアからブロードウェイへ」を翻訳された樫本真奈美さんの「訳者あとがき」を、群像社とご本人の了解を得て、抜粋し掲載させていただきます（タイトルは編集部でつけました）。

＜ユル・ブリナーの真実＞ 訳者あとがきより

ウラジオストク生れのロシア人でスイス人 日本とも深い関わりで結ばれる

樫本 真奈美（同志社大学講師）

本書は、ミュージカル『王様と私』で有名な俳優ユル・ブリナーの息子で、ニューヨーク在住の著述家ロック・ブリナーが 2006 年に出版した *Rock Brynner Empire and Odyssey: The Brynners in Far East Russia and Beyond* を底本に翻訳したものである。2016 年にはウラジオストクでロシア語版が出版されている。

アメリカ人俳優として世界に名を馳せたユル・ブリナーは、ロシアのウラジオストクに生まれたロシア人だった。正確には、ユルが生まれた 1920 年から 2 年間だけ極東ロシアに存在した「極東共和国」だ。これは、日本を含む第一次世界大戦の連合国が共産主義を打倒する名目で軍事干渉を行った（シベリア出兵）時に、その干渉軍に対峙する名目でソヴィエト政権によって建国された短命の緩衝国だった。家族の事情も相まって、ユルは 6 歳でロシア革命の波に飲み込まれた故郷を後にし、満州のハルビン生活を経てフランスに移住、その後アメリカのニューヨークに腰を落着けた。

スイスには「父系特権」があり、スイス人男性を父親に持つ子孫は皆、生まれた場所がどこでも四世代にわたってスイス国籍を有することができる。この「スイス国籍」がブリナー家の危機を何度も救うことになる。

アメリカでスターの座に上りつめてからも、ユル・ブリナーはその出自を曖昧な言動や嘘で煙に巻き続けた。「母はジブシー」「日本の樺太生まれ」などは嘘だった。米ソ冷戦の最中であって「ロシア人」という出自を強調したくなかったともいわれるが、「極東共和国」という特殊な事情をアメリカのゴシップ記者には理解できないと思ったようだ。日本でもユルが来日するたびに、本人の「リップサービス」と憶測をもとに「出生の秘密」と題して週刊誌が度々取り上げた。東

洋的な外見を持つ大スターに日本人の血が流れているかもしれない、という「期待」もあったのかもしれない。

実際、ユルは日本とも関わりの深い俳優だった。

祖父ユリウスはスイス人の実業家で、明治時代に日本にやって来て長崎、横浜に約十年暮らした。アメリカ人が経営する貿易会社に勤めるうちに海運業に注目し、ウラジオストクに拠点を移して「ブリナー商会」を創業、鉱山業や木材事業にも着手して極東ロシアの開発と発展に貢献した人物である。

ユリウスは日本に居住していた時、長崎通詞の娘と家庭を持った。ふたりの娘のうちひとりが広告会社「弘報堂」（現在の株式会社日本広告社）の創業二代目に嫁いだ。弘報堂は福沢諭吉が創刊した日刊新聞「時事新報」に勤務していた弟子の江藤直純が師匠の意を受けて創業した日本最初の広告会社である。江藤直輔氏はその孫にあたり、後に中国で「ブリナー商会」を手伝ったり、戦後は金属業に携わり成功を収めた。

英語が堪能だった直輔氏とユルの交流は生涯続き、ユルが肺ガンを患ったと知ると、当時日本で末期ガン患者に効果があるとされていた丸山ワクチンを手配するなど、最期まで従兄弟を気遣ったという。

祖父ユリウスは日本からウラジオストクに渡った後、ブリヤート系ロシア人女性と結婚した。ユル・ブリナーはこのふたりの孫にあたる。日米合作映画『あしやからの飛行』の撮影が 1962 年に日本で行われた時、息子のロックを連れて来日し、同じ祖父を持つ江藤氏と京都で会っている。

黒澤明の傑作『七人の侍』を改作して世界的に大ヒットした『荒野の七人』はあまりに有名だ。ユルは主演を演じたのみならず、この作品に惚れ込みアメリカで侍映画の西部劇版を考えたのはユル自身だった。1956 年来日した時にはオリジナル作品の上映を観て、日本の侍をどのようにしてカウボーイに西部劇化するのか頭を捻り、原作に敬意を表してあらずじや設定を忠実に再現している。

また、『荒野の七人』はソ連全土で公開された初めての西部劇となり、正義感だけで団結したカウボーイたちが無力な農民を助けるという理想的な設定にロシア人も魅了された。ソ連国内でも空前の大ヒットとなった。ソ連時代のロシアではブルジョワだったブリナー（ユルの代からは「ブリナー」）家は人民の敵とされ、30 年代には一家全員がソ連を脱出している。この一家の功績に光が当てられ一般に知られるにはソ連崩壊を待たねばならなかった。アメリカの大スターがロシア生まれの俳優であることを当時この映画を見たロシア人はほとんど知らなかっただろう。公開から約一年経ってから、ソ連当局は 16 歳以下の子どもに『荒野の七人』を観るのを禁じた。理由は、ユルに憧れてスキンヘッドにしたがるロシア人少年が後を絶えなかったからだという。

初演から約 30 年の時を経て、『王様と私』の再演が 1977 年からブロードウェイで始まった。56 歳の円熟したユル・ブ

リンナーが演じる王様は、「個性と役柄の完璧な融合」と称され 18 か月におよぶニューヨーク公演は連日満員御礼だった。その後のロンドン公演でも称賛を浴び、英国王室臨席のもとで「王様」はエリザベス女王と挨拶を交わした。

日本で富士フィルムの広告に出演し、お茶の間を楽しませていたのはちょうどこの頃である。

80 年代に入っても精力的に『王様と私』の公演を続ける中で、ユルに肺ガンが見つかる。タバコはユルのトレードマークだったが、十代の早くから一日に四箱近く吸い続けた喫煙が身体を蝕んでいた。

1985 年 6 月、4633 回目の公演が行われ、ユルの俳優業最後の仕事となった。

しかし、正確にはここで終わらなかった。

ユルは肺ガンが発覚してから密かにアメリカ癌協会の広報ビデオを撮影していた。最終公演の 3 か月後にこの世を去り、世間にその訃報が周知されてから数か月して、『僕はもうこの世にいないけれど、とにかく言いたいことは、タバコをやめなさい、何はともあれ絶対にタバコだけはやめなさい』と威厳ある姿でまっすぐに訴えるユルの姿が公共広告としてアメリカ全土に流されたのだ。このコマーシャルはユルの没後 3 年間にわたって放送され、その衝撃の強さで多くの人が喫煙をやめたと言われている。

ユル・ブリンナーは最後まで「王様」として堂々たる生涯を閉じたのである。

(『ロシアからブロードウェイへ』訳者あとがきより抜粋)

本の紹介

ウクライナ戦争を考える

ウクライナ戦争をどうとらえるか。多くの書籍が出版されていますが、手ごろで読みやすい参考図書をいくつかご紹介いたします。

「ウクライナ戦争」小泉悠著 ちくま新書

開戦 1 年前の 21 年 1 月から 22 年 2 月 24 日軍事侵攻にいたるロシアとウクライナ・米 NATO の動き、開戦後 22 年 9 月までの 7 ヶ月間の戦況が軍事専門家の視点から明快に整理・分析されている。本書は、「軍事オタク」を自認し、多くのメディアで活躍している著者の「ウクライナ戦争中間総括」ともいえるべき解説書である。

開戦初期には圧倒的に劣勢と考えられていたウクライナ側の意外な抗戦と成功の要因、対するロシア側のなし崩しの方針転換（全面侵攻の失敗から東部 2 州への集中）、その後の米

欧諸国の「ウクライナが決定的に勝利しない程度の小出しの援助」（背景にある第 3 次世界大戦＝全面核戦争への危惧）、綻びるロシアの戦争指導（プーチンの干渉、情報機関との軋轢）とウクライナ側の巻き返しなど、さすがによく戦況を観察し分析しており、この戦争を理解する参考になる。

「プーチン戦争の論理」

下斗米伸夫著 集英社インターナショナル新書

ロシア研究の第一人者が読み解くプーチン大統領の行動原理。プーチンの行動を理解するためには、ロシアが置かれている軍事的経済的な状況だけでなく、多くのロシア人が持つ宗教観・民族観を知る必要がある。カギの一つは侵攻前の 21 年 7 月にプーチン大統領が発表した「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」という論文。もう一つは東西に分裂した「二つのウクライナ」問題。ここにソ連解体後に結成された CIS（独立国家共同体）をめぐる各国政治指導者の「同床異夢」が加わり、歴史や言語、宗教といったアイデンティティをめぐる新たな「文明の衝突」（サミュエル・ハンチントン）が発生すると著者は言う。

軍事侵攻の背景にある NATO の東方拡大と、2014 年マイダン革命に端を発した東部ドンバス地方の内戦、1991 年ソ連解体後の CIS 設立の経緯、ロシアと旧ソ連諸国との関係など、ロシアとウクライナの対立の根源を現在と過去の歴史を縦横に行き来しつつひも解き、将来の停戦シナリオとウクライナ戦争後の安全保障を展望する。ロシアに深く通じた著者ならではの情報満載で、とても勉強になる。

「非戦の安全保障論～ウクライナ戦争以後の日本の戦略」

柳澤協二ほか自衛隊を活かす会編 集英社新書

「ロシアのウクライナ侵攻によって世界は再び戦争の時代に入ったのではないか？」。本書は、防衛庁・自衛隊の元幹部らでつくる「自衛隊を活かす会」が、開戦 1 か月後の 22 年 4 月に行った鼎談をもとに、6 月初旬＝開戦 100 日時点での論稿を加えて出版されたものである。

「侵攻を契機に、『防衛力の抜本的強化』とか『敵基地攻撃』『核の共有』といった勇ましい議論が幅を利かせています。しかも相手は中東の武装集団ではなく、軍事大国・中国です」、「中国との戦争では、自衛隊が海外で戦うのではなく、日本国内がミサイルが飛び交う戦場になります。ミサイルは、自衛隊だけを狙ってくるわけではありません」

「はじめに」に書かれたこの一文に、本書の問題意識が凝縮されている。4 人の論者がウクライナ戦争の現実を分析しつつ、日本の外交防衛政策を点検していく。軍事専門家の立場から具体的に防衛戦略を考えている人たちから見ると、日本の安保政策がどれほど現実離れした空論から出発しているかがよくわかる。

2023 年 2 月 12 日／大阪日口協会講演会

講演録

シベリア抑留問題、その歴史とこれまでの取り組み

有光 健（シベリア抑留者支援・記録センター 代表世話人）

本日はシベリア抑留問題の歴史経過と最近の取り組みについて、限られた時間ではありますが、お話しさせていただきます。

地図は 1946 年ごろのソ連領内の日本人収容所分布図です。これを見ると分かりますが、「シベリア抑留」というよりは正確には「ソ連・モンゴル抑留」ですね。「シベリア」というのは、だいたい地図の右半分、オムスク、ノボシビルスクあたりから東のバイカル湖やオホーツク海にいたる広大な地域をいいますが、実際に日本人が収容されていた収容所はソ連全土約 2300 カ所にあったと言われています。東はカムチャツカ半島、北は北極圏、気温がマイナス 50 度～60 度にもなるエニセイ川河口のノリリスク（ナリリスク）あたりまで送られており、西はモスクワ近郊、さらにカスピ海から黒海の近く、中央アジアのウズベキスタン、カザフスタン、キルギスなどにも日本人捕虜が抑留されていました。

ソ連全土 2300 カ所に抑留されていた日本人捕虜

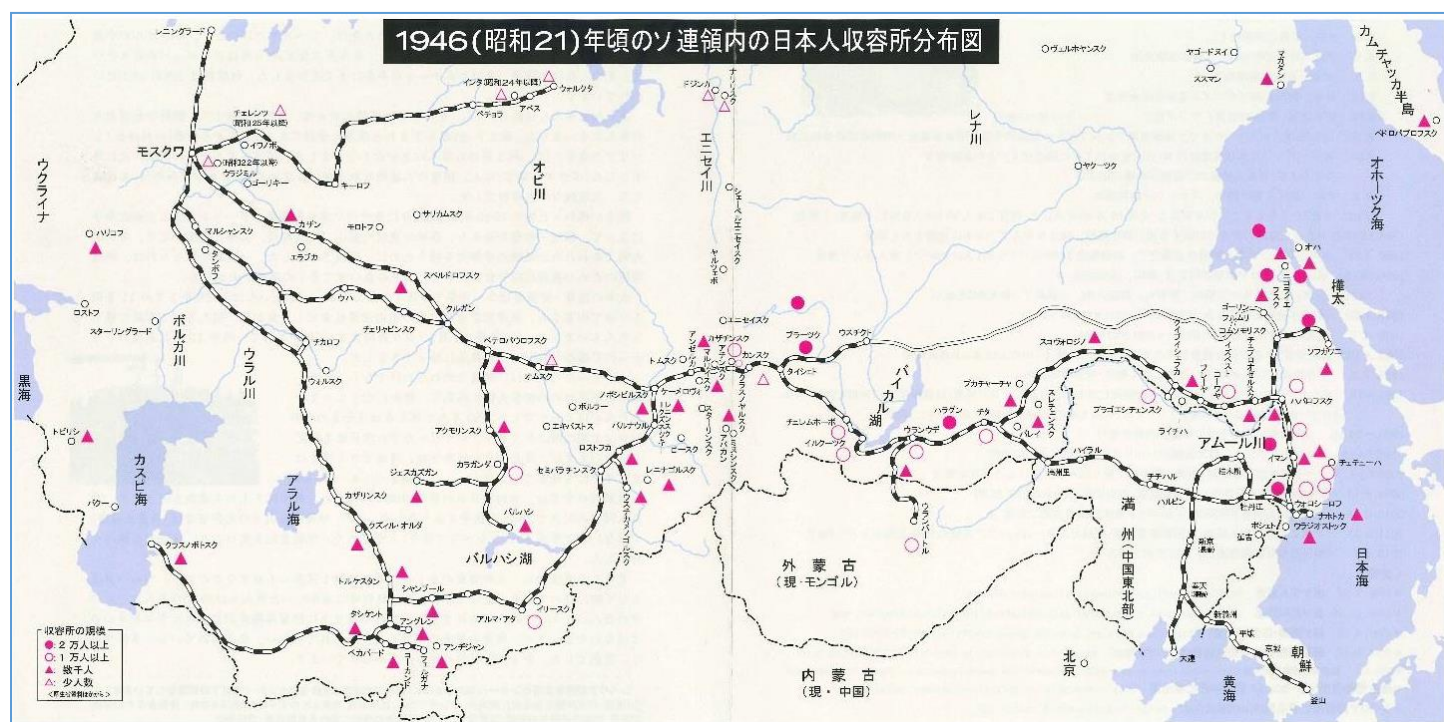
もう 78 年前の話ですから、当時の収容所のかなりの部分は実際どこにあったのか分からなくなっています。日本の厚生労働省が把握しているのはそのうち約 500 カ所です。その中で実際に厚生労働省の係官が現地を訪ねたのは 230 カ所くらいで、

ですから実際は十分の一しか確認できていないというのが現状です。

現在、戦争が続いているウクライナにも、これは抑留開始後一年くらい経ってからですが、約 5000 人の日本人が送られていました。死亡者は約 250 人（死亡率約 5%）です。シベリア抑留全体の犠牲者（死亡者）数はだいたい一割＝10%なのですが、ウクライナの場合は少し暖かいということと、送られた時期が抑留開始直後ではなかったのが、死亡率が少ないです。ウクライナで亡くなった人が一番多い場所はドンバス地方で、ハリコフ（ハルキウ）もそうですね。今、激戦が続いている地域に埋葬されているので、場所はわかっているのですが、遺骨収集はできていません。ウクライナに今も約 250 柱の遺骨が残っているわけです。

今なぜシベリア抑留か

今なぜシベリア抑留かという、一つはこのウクライナ戦争です。ロシアの軍事侵攻が、やはりどうしても 78 年前の歴史と記憶に重なってしまう。もう一つは、昨年 12 月 9 日から全国公開された映画『ラーゲリより愛を込めて』（主演：二宮和也、北川景子）のヒットです。これは TBS の制作、東宝の配給で、今現在も全国 352 館で上映中です。もう 2 ヶ



月のロングランで 185 万人以上の人々が観たそうです。私は初日に新宿の一番大きな映画館に見に行きました。初日のイベントとして日比谷の劇場で監督や俳優の舞台挨拶が行われ、それが全国の劇場に同時配信されたのですが、新宿も日比谷も満員でした。観客の大半は女性で、男性は 50 人に 1 人ぐらい。おそらく主演した嵐の二宮和也さんやジャニーズのファンで、シベリア抑留をほとんど知らない若い方々ですから、これがシベリア抑留を多くの人たちに初めて知っていただく、大きな起爆剤になったという気がします。

シベリア抑留を描いた映画

シベリア抑留についての映画は、戦後何本か作られています。しかし、正面からシベリア抑留をきちんと描いたものが実はほとんどなかったのです。

戦後早い段階の 1949 年に、この時はまだ実際に相当数の方がソ連に抑留されていた時期ですが、新東宝が『異国の丘』という作品を作っています。「異国の丘」は吉田正が作曲した楽曲ですが、これをテーマにした映画です。それが好評だったので、同じ新東宝でやはり 1949 年に『ダモイ (帰国)』という映画が作られました。『異国の丘』は、実際にはソ連のシーンはほとんど登場せず、抑留されたお父さんの帰りを待つ一家のファミリードラマのような感じでした。『ダモイ (帰国)』の方は、オムニバス形式で三つほどのエピソードで構成されているのですが、やはり帰国者を待つ家族、それから帰国後の元捕虜の非常にデリケートな心情を描いた作品です(新東宝『異国の丘』は DVD が出ています)。

もう一つ、1952 年に『私はシベリアの捕虜だった』というシュウ・タグチ・プロ制作の映画があります。黒柳徹子さんの父・黒柳守綱さんはバイオリニストでシベリア抑留者だったんですが、シュウ・タグチさんというのは黒柳守綱さんのお兄さんです。本当はドキュメンタリー映画を作りたいかったけれども、当時はもちろんソ連に行くことができなかったのです。北海道でロケして作ったドキュメンタリー風の作品です。ただし、これはアメリカの CIA が資金提供していたんですね。当時もそういう噂が流れていて、米側文書で確認されたのはずっと後なのですが、“反共プロパガンダ映画”ということで、日本の映画史の中では正当な評価を得ていなかった作品です。このプリントは日本に残ってなくて、数年前にアメリカの国立公文書館で発見されたものが DVD になって、市販されています。それまでの二作品が日本国内での話ばかりだったのに対して、この作品ではソ連の収容所の中が舞台で、当時実際に起きたことを映像化しており、今見ても興味深い内容になっています。

それから 1958 年に『ソ連脱出—女軍医と偽狂人』というちょっといかがわしい作品が新東宝から出ています。これも一応実話をもとにした作品だということになっていますが、よく分からない映画で、日本の映画史ではまともな評価を得

ていません。

映画『ラーゲリより愛を込めて』

したがって、シベリア抑留の過酷な実相を正面から描いた映画としては、1952 年『私はシベリアの捕虜だった』くらいで、それから 70 年ぶりに『ラーゲリより愛を込めて』という映画がシベリアの収容所を舞台に作られたわけです。この作品の原作は『収容所 (ラーゲリ) から来た



遺書』(辺見じゅん著、文芸春秋、1989 年) です。これをフジテレビが 1993 年に寺尾聡といしだあゆみの主演で映像化し、テレビドラマとして放映したものがあります(製作・東映)。『収容所から来た遺書』は演劇でも平田満などの主演で何回か上演されています。浅利慶太の劇団四季は『異国の丘』というミュージカルを 2001 年からやっています。こういった作品や、あと映画としては『人間の条件』(五味川純平原作・小林正樹監督・仲代達矢主演、1959-61 年)の最後の部分とか『不毛地帯』(山崎豊子原作・山本薩夫監督・仲代達矢主演、1976 年)の最初のシーンとかには出てくるのですが、真正面からシベリア抑留を取り上げた作品は本当にこれまでなかったので、その点で画期的だと思います。

8 月 23 日のスターリン秘密指令「50 万人の捕虜移送指示」

シベリア抑留、これはもうとにかく人災です。その起点は 1945 年の 8 月——第二次大戦末期の 8 月 9 日に、旧「満洲」(中国東北部)と北朝鮮にソ連軍が攻め込んできました。広島、長崎の原爆投下とこのソ連参戦を受けて、日本は 8 月 15 日に天皇が敗戦をラジオで宣告します。その一週間後、8 月 23 日にスターリンの秘密指令が出されました。これが起点なわけです。しかし、この秘密指令が明らかになったのは 1992 年のことです。6 月 3 日付の読売新聞一面で、「日本軍捕虜 50 万人を移送せよ」という極秘指令の全文を入手したという記事が報道されました。

実際に抑留されていた人たちは、一体何のために、どこへ自分たちが連れて行かれたのかも、ずっと長く正確には分かってなかったんですが、当時ペレストロイカからソ連崩壊の過程で、ロシアの公文書館でそれまで秘密とされてきた歴史

資料が明らかになり、実はこういう指令が出ていたのだということが分かったわけです。スターリンの秘密指令を読むと、シベリア抑留の目的は非常にはっきりしていて、とにかく戦争で破壊されたソ連の国土の再建と経済復興のために、日本人捕虜を労働力として活用するということでした。

読売の記事にはバム鉄道（バイカル・アムール幹線鉄道）の地図が挿入されていますが、バム鉄道というのは、バイカル湖の南を走るシベリア鉄道に対してバイカル湖の北側にもう一本鉄道を通してシベリア開発を促進させようという計画が以前からあり、独ソ戦で工事が中断していたのですが、それを戦争後日本人捕虜を使って建設させようとしたわけです。当初計画 50 万人のうち 15 万人をバム鉄道建設に投入し、山を切り開き森林を伐採して枕木を作り、西と東の両側から鉄道建設を進めました。あとは炭鉱、都市の復興、道路・水路建設、工場労働、あるいは夏場の農作業の手伝い、そういった仕事をさせられました。秘密指令には、バム鉄道に 15 万人のほか、ハバロフスク地方に 6 万 5 千人、イルクーツク州に 5 万人、カザフ共和国に 5 万人といった具合に、どこに何人動員するか、どんな作業をさせるかという指示が非常に詳しく書かれています。

抑留者の総数は 60 万人超

当初は 50 万人の計画でしたが、シベリアへ日本人捕虜を移送した後に、体力がないとか病気になった人たちは使いものにならないので、途中で先に返すのですね。その代わり、北朝鮮と旧満洲のソ連支配地域の収容所にいた日本人捕虜を差し替えてあとから連れて行く。そういうこともあり、抑留者の数は全体で 60 万人を超えています。

体力のない捕虜をまっすぐ日本に返すとソ連の劣悪な待遇がばれてしまうので、北朝鮮に送り返したりします。従ってソ連だけではなくて、北朝鮮でも体力のない人たちがばたばたと亡くなっていて、それがどれくらいの数になるのか正確なことが分かっていません。2 万人近いのではないかとの説もありますが、正確には分かりません。「北朝鮮逆送」というテーマで 2005 年に NHK がドキュメンタリーを作ったこともありました。

「シベリア三重苦」で 6 万人の犠牲者

繰り返しますが、収容所の数はソ連全土で約 2300 カ所あり、日本人抑留者は森林伐採・鉄道建設・炭鉱・ダム・住宅建設・農作業・工場などの強制労働に従事させられました。これは明らかにポツダム宣言違反です。ポツダム宣言では、「日本の軍隊は、完全な武装解除後、平和で生産的な生活を営む機会と共に帰還を許されるものとする」と規定されていました。

それから、大部分の日本人捕虜が移送されたのは夏です。夏の装備でソ連領に入って行ったわけです。しかし、ソ連・

ロシアでは早ければ 9 月ぐらいから雪が降ったりして大変寒い。戦争直後で食料事情も悪い。50 万人～60 万人もの日本人捕虜を収容する十分な体制が整っていないところに、どんどん連れてきたものですから、死亡者の数は全体の約一割、6 万人と言われています。その大半は最初の冬が越せなくて、1945 年の 12 月から翌年 4 月くらいの間に圧倒的に多数の犠牲者が出ています。

いわゆるシベリア抑留と言うと、すぐにイメージするのが、厳しい寒さ、食糧の欠乏、過酷な労働の「シベリア三重苦」。この三重苦でたくさんの方が犠牲になったと言われています。

これは捕虜の待遇を規定したジュネーブ条約にも違反しています。捕虜を労働力として使ってはいけないということではないのですが、労働力として使った場合にはきちんと給料を支給しなければならない。しかし、シベリア抑留者の場合、実際にはほとんど給料を支払われることが無かったのです。

シベリア抑留の特質①～収容所内での対立抗争

「シベリア三重苦」にさらに二つプラスして、私は「五重苦」と言っています。残りの二つは何か。これを私は強調したいのですが、一つは収容所内での日本人同士の対立・抗争です。

当時、軍国主義に染まった日本の兵士たちは、それまでと全く違う社会主義国、共産主義国であるソビエトに送り込まれた。思想的に異質な、それこそ 180 度違う世界に放り込まれたわけです。その中でソ連側からの意識的な働きかけや洗脳もありましたが、最初とにかく食料が圧倒的に足りなかった。旧軍隊の秩序、そのシステムのまま送り込まれたので、圧倒的多数の下級兵士たちは本当に食べ物なくて苦しんでいるのに、将校たちは食料を多く得て、つらい作業には出てこない、その身の回りの世話などあらゆる雑役を下級兵士がやらされたわけです。体力的に大きな差が出てきて、下級兵士ほど死亡率が高くなります。

これはやっぱりおかしい。「戦争が終わったのになんで将校たちがいつまでも威張ってるんだ」「階級章を取り払ってみんな平等に配給すべきだ」、当然こういう声が上がります。これはまさに下級兵士たちが生き延びるための闘いだったと思いますが、それがいわゆる民主運動へと発展していきました。シベリア抑留の収容所内で繰り広げられた民主運動は、初期の運動は非常に自発的なもので、自然発生的な動きだったと考えられます。しかし、当然それに対する反動も強いわけで、守旧派である将校たちはこの運動に抵抗して争う。ということで、激しい吊し上げや、リンチ、抗争があった。密告や裏切りもあったということです。

南方での日本人捕虜の場合

日本人捕虜に関しては、南方でもアメリカ、イギリス、オ

オーストラリア、オランダなどの捕虜になった日本の軍人・軍属が多数いました。シベリアは寒い／南方は暑いという違いはありますが、南方の捕虜たちも食料が相当足りず、飢えていた。それから、ソ連ではそういうことではないのですが、特にオーストラリアとかオランダ、イギリスの兵士たちで、戦争中、日本軍の捕虜になった人はひどく虐待されました。有名な“バターン死の行進”（1942 年）とか、“泰緬鉄道”の悲劇（泰緬鉄道建設捕虜虐待事件 1942～43 年）とかですね。圧倒的な食料不足、医薬品不足の中で過酷な扱いを受けてた皆さんの犠牲者が出ています。それへの報復ということもあり、日本側の記録では「戦病死」になっていますけれども、復讐テロというか、リンチを受けたりして死亡する例もあったようです。戦地で行われた戦後の戦犯裁判でも、報復的な要素が相当ありましたし、強制労働による不当な使役もありました。

ただ、米軍は捕虜の労働に対してきちんと対応しました。労賃の支払いをしたわけではありませんが、使役したという労働証明書を発行し、最終的には横須賀港に捕虜だった人が帰ってくると、大蔵省の職員が待ち受けて、その証明書に応じて日本円で労賃を現金支給しています。しかしイギリスは、これは非常にずるいやり方ですが、ジュネーブ条約の適用を外すために、捕虜ではなく「降伏日本人」（Japanese Surrendered Personel）という特別な用語を作って、結局支払っていません。シベリア抑留者だけではなく、イギリス軍の捕虜になった人たちも実際は労働の対価を受け取ってないのですが、しかしながら、収容所の中で日本人同士が激しく対立して犠牲者が出たというようなことは、南方の収容所ではまずなかった。だいたい上から下までまとまって、励まし合って帰国してきたというのが南方の捕虜の歴史です。

民主運動の過激化が対立を深める

シベリアの収容所内での民主運動は、ソ連側がそういう誘導を行ったという側面もありますが、途中から過激化して、民主運動のリーダーたちが主導権をとって各収容所を支配していくという方向に進みます。それまで虐められていた下級兵士たちが将校連中を「反動」と攻撃して吊し上げるといった事例が頻発しました。それに対する恨みつらみや収容所内の対立が、今度は日本に帰る引揚船の中に持ち込まれ、力関係が逆転して、船の中で逆の吊し上げがあったりもしました。舞鶴に帰着した段階でも、数日間、引き揚げ寮に留め置かれて調査を受けたりするのですが、実はそこでも日本人同士の抗争があり、血も流れていました。

ですから、シベリア抑留の話というのは、その多くは「シベリア三重苦」で苦勞して、舞鶴に帰還してやれやれ良かったねという話になっているのですが、必ずしもそれだけではなかった。抑留の時期や場所によっても違いますけれども、収容所内で日本人同士の大変な対立や抗争があったということです。

シベリア抑留の特質②～「シベリア帰り」への差別

もう一つは、帰国後の差別です。抑留者たちが帰ってきたのはアメリカ軍占領下の日本国です。共産主義の国から反共の国へ帰ってくるわけですから、ここでもう一回価値観の大転換を強いられます。これは GHQ から指示が出ていて、「シベリア帰りの連中の中に共産主義者が沢山いるから監視しろ」ということで、非常に冷たい扱いを受けます。

まず、舞鶴に帰ってきた段階で尋問がありました。日本側係官の一般的な尋問の後で、目星をつけられた人が 5 人に 1 人程度の割合で、米軍から直接尋問を受けました。通訳の多くは日系人で、ウソ発見器にかけられた人もいます。

それぞれ故郷にもどった後も、地元の巡査がやって来て尋問したり、行動を監視したりします。さらに、いわゆる「シベリア帰り」というのは就職がなかなかできない。彼らを雇うと組合を作って争議を起こすから雇うなと言われてたり、漁業協同組合にも入れてもらえなくて獲った魚を売ることができなかったり、「シベリア帰り」は大変な社会的差別を受けました。

彼らは帰還兵なので、本来は労働省や厚生省がその生活再建を支えるために率先して再就職の世話をすべきなのに、当時の日本社会はまったく逆に、それこそ行政が音頭をとって彼ら抑留帰還者を排除してしまったわけです。東西冷戦がすでに始まっていたのでやむを得ない側面もあったとはいえ、しかし、客観的に考えればまったく間違ったことをしたと思います。

この社会的な差別と疎外は、南方から帰ってきた他の元捕虜・帰還兵が経験したことと全く異なります。そういう意味で「収容所内での対立抗争」と「帰国後の差別」を合わせて、私は「五重苦」と言っています。

見方によって異なる抑留者の総数

厚生労働省は、抑留者の総数は 57 万 5 千人、うち死亡者は 5 万 5 千人と言っています。これは正確な統計がなくて、引揚者の名簿などから逆算して出した数字です。

日本とロシアの研究者はだいたい 63 万人くらいではないかという数字を出しています。いや、シベリア抑留は 70 万人だ、100 万人だと言う人もいます。「シベリア抑留」をどう規定するかによって数字が違ってきます。

スターリンの最初の指示は旧満州と北朝鮮にいた日本の軍人・軍属 50 万人を移送するということでしたが、実際に国境を越えてソ連に連れていかれた人たちは約 60 万人強にのぼります。当時は、旧満州も北朝鮮もソ連軍が占領していました。南樺太（サハリン）も同じですね。そうすると中国や北朝鮮にもソ連軍の収容所があって、そこで同じように「三重苦」で強制労働させられて、1 年ぐらい経ってから日本に帰国したという抑留体験者がかなりいるわけです。この人たちはソ連側のシベリアには行っていないので、シベリア抑留者

にカウントされていませんが、しかし実態としては、北朝鮮や中国東北部、また樺太の収容所で抑留された人もほぼ同じ状況であったので、それらの方も含めるべきだという説もあります。そうすると数字が増えます。

女性や子供、朝鮮・台湾の出身者も含まれていた

シベリア抑留者の大半は軍人・軍属ですが、中には民間人や女性・子供も含まれていました。女性の抑留者については、生田美智子・大阪大学名誉教授らの調査研究がありますが、看護婦さんやタイピストといった方々が抑留されています。子供は少年兵というか、満蒙開拓少年義勇軍というのがありまして、満洲の開拓のために、15 歳になったばかりの少年たちが日本各地から送られていました。その人たちの中でシベリアに連れて行かれた人が相当います。現地に住んでいて、中学生だったにも関わらず、ソ連軍が移送する時に頭数が足りないので無理矢理放り込まれた年少の人たちもいます。満蒙開拓少年義勇軍の死亡率は約 20% です。シベリア抑留者の平均値(10%)よりも沢山の犠牲が出ています。さらに、当時の日本の植民地＝朝鮮、台湾の出身者も、数はそう多くないですが抑留されています。

戦犯として長期抑留された人も

一般的な抑留者というか、日本人捕虜の大半は労働力として使役するためにソ連に抑留されたわけですが、やや特殊なケースとして、戦犯扱いされて長期抑留された人もいます。関東軍の幹部将校、満洲国あるいは樺太政庁の高官・役人などです。それから満鉄（南満州鉄道）調査部ですね。ここのスタッフは優秀で、ロシア語の堪能な人を揃えて、対ソ連のスパイ活動なども行っていました。この人たちの中には反革命罪、スパイ罪という罪状で、ソ連国内法で裁かれて銃殺された方もいます。途中で国内法が変わって死刑がなくなり、25 年の長期刑になりましたが、大半の抑留者が 3～4 年で帰国したのに対し、戦犯とされた人たちは最長 11 年間抑留されていました。最後の引揚船が舞鶴港に入ったのは 1956 年 12 月のことです。今回の映画『ラーゲリより愛を込めて』の主人公はまさにその中の一人だったわけです。ですから、すべての抑留者がこの映画と同じ体験をしたというわけではありません。

遅れたシベリア抑留の真相究明

シベリア抑留の真相究明は非常に遅れました。戦後、この問題が日本社会であまり知られることがなかったのには、いくつか理由があります。

まず、抑留体験者の平均年齢は今年 100 歳になるのですけれども、自身の体験をあまりしゃべっていない。家族にもほとんど話してないという人が非常に多いです。先に触れたように、帰還後も「シベリア帰り」は差別され、辛い思いをし

ました。「共産主義者じゃないか」と間違えられるので、家族から「しゃべるな」と釘を刺されるし、自身もできることなら抑留中の辛い体験は話したくないという思いがあり、そういうことで話してないわけです。

そもそも大日本帝国では「捕虜」というものはあってはならない存在でした。東条英機が陸軍大臣の時に作った「戦陣訓」には、「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」と謳われています。だから、捕虜になってはいけない。捕虜になるくらいなら死ぬ。そういう認識で、捕虜になっておめおめと帰ってきたのは恥ずべきことだ、というふうに日本社会全体が洗脳されていたわけです。

「捕虜」だったという汚名と、「あいつは『シベリア帰り』のアカだ」というレッテル、この 2 つが非常な社会的プレッシャーになっていたと思います。

実証研究が遅れた理由

実証的な研究も残念ながら遅れていました。これはすべてソ連の中で起きた事件ですから、その資料と情報はみんなソ連側にあるわけです。それがなかなか開示されない。ペレストロイカが始まるまでは信頼できる資料がほとんどありませんでした。ソ連側の隠ぺいや情報操作も当然ありました。

日本側のアカデミズムにも怠慢というか、この問題を避けてきた面がありました。特に日本の歴史学はマルキシズムの影響が大きかったので、シベリア抑留の問題を研究すれば当然ソ連批判になるわけで、そこに踏み込めなかったという事情もあります。

さらに、シベリア抑留者の団体がいくつかに分かれて、まとまってなかったことがこの問題を難しくしていました。学者の方々も当事者団体が割れていると、「おまえはどっちだ」みたいなことを言われかねないので、動きにくかった。このような理由から、シベリア抑留問題が率直に語られてこなかったし、長らく十分な調査研究がなされてこなかったわけです。

そういう中で、日本政府の対応が非常に遅れていたものですから、抑留体験者たちが自身で歴史の掘り起こしを行ってきました。新潟で中学校教師をやっていた村山常雄さんは、抑留犠牲者 46300 人の名簿をたった一人で作成し、ホームページで公開しました。また、抑留者で作る会が、『捕虜体験記』という全 8 冊の大変しっかりした本を、1980 年代から 1990 年代にかけて、自分たちで書いて、編集して、お金を出しあって、出版しています。この事業は 1998 年度の「菊池寛賞」を受賞しました。

結局、国がやってくれないものですから、抑留体験者たちが自分たちでずっとやってきた。そういう歴史があります。

抑留犠牲者は戦没者ではない

このシベリア抑留の問題は、戦争中に起きたエピソードの

一つとして理解し、記憶している人が結構多いのではないかと思います。しかし、これは戦争が終わった後の話です。抑留者は戦場や空襲で亡くなった戦争被害者ではなくて、要するに拉致被害者なんです。「日本に返す」「東京に返す」と言われて汽車に乗ったら、全然違う場所に連れていかれて、働かされた。過酷な労働、厳寒、食糧不足の「三重苦」で多くの人が亡くなった。その意味では、これは戦後処理の失敗による被害者・犠牲者であり、もう一つはスターリニズム・東西冷戦の被害者であるとも言うことができます。

他のいわゆる戦争被害、戦時中に起きた様々な加害と被害とは、本来区別して議論されるべきことなのです。ところが、一般的には「シベリアも大変でしたね」「ご苦労さんでした」というのが日本社会の捉え方で、国会議員など政治家の方々と話をしてもそのように言う人が多い。したがって、日本政府としても基本的に「労苦を慰藉する」という立場でこの問題に対処してきたわけです。

抑留犠牲者は「戦没者」ではありません。毎年 8 月 15 日に日本武道館で全国戦没者追悼式が行われますが、そこでは「戦禍に倒れ戦陣に散り」という言葉が必ず天皇のメッセージに入ります。しかし、抑留犠牲者はそうではないでしょう？ 病気で亡くなっていた、食料が無くて、過酷な労働によって亡くなっている。そういう意味では、餓死者であり、労災被害者であり、壮大な人災＝拉致被害者だというのが正しい認識ではないかと思います。

そもそも「抑留者」という言葉からしておかしい。抑留する側が抑留者であって、抑留された側は被抑留者ですよ。あるいは抑留犠牲者と言うべきです。国の行政用語としては「戦後強制抑留者」という言葉が使われていますが、これもどうなのかという感じがします。「抑留者」という用語からして、この問題の捉え方が、戦後日本の社会でどこかずらされている、という感じがします。

シベリア抑留の歴史経過（1945 年～1956 年）

ここで、資料の年表をもとに、ざっと歴史を振り返っておきます。

冒頭に紹介したように、1945 年 8 月 23 日のスターリンの秘密指令が「シベリア抑留」の起点です。同年 9 月 12 日、ソ連は「9 月 9 日までに日本軍兵士・士官 59 万 4000 人以上、将官 148 人を捕虜にした」と発表しました。その後、日本政府はポツダム宣言の条項にもとづいて、日本人捕虜の早期帰還を働きかけますが、当時日本はソ連と国交がなかったため、アメリカを通じて交渉します。1946 年 12 月に米ソ協定（「在ソ日本人捕虜の引揚げに関する米ソ協定」）が締結され、毎月 5 万人ずつ日本に送還すると決められたのですが、残念ながらその通りには進みませんでした。

日本の国会では 1947 年 7 月の第一回国会参議院に「在外同胞引揚問題に関する特別委員会」が設置され、これはシベ

リア抑留者だけではないのですが、議論が始まります。

シベリア抑留者の大半は 3 年～4 年間の抑留で、1947 年から 48 年に帰国した人が多いわけですが、1950 年の 4 月にタス通信が「日本人捕虜の送還は完了した」と一方的に発表しました。その時点でソ連に残留していたのは戦犯 2458 人・病人 9 人で、これは戦犯であり、当分帰国させないということでした。

そして、この戦犯とされた人たちのうち 969 人は 1950 年の 7 月に中国に引き渡されます。ソ連に日本から攻め込んだわけではなく、ソ連で戦犯裁判を受けるというのはおかしいわけで、日本軍が攻め込んで迷惑をかけたのは中国ですから、中国の戦犯裁判に容疑者を引き渡すという理由で、中国・撫順の戦犯管理所に引き渡されました。

最後に残った方々を取り戻すために、1956 年 10 月に鳩山一郎首相がモスクワに乗り込み、「日ソ共同宣言」に調印して国交を回復します。こうしてようやく全員の帰還が確認され、2 ヶ月後の 1956 年 12 月 26 日に舞鶴港に最後の引揚船「興安丸」が入港して、ここでシベリア抑留は終わることになります。ただし、中国に送られた 969 人は中国で裁判を受けて、途中病気で亡くなった人もいますが、最後に帰ってきたのは東京オリンピックの年の春のことです。その人たちを加えると、シベリア抑留が最終的に終わったのは厳密には 1964 年ということになります。

抑留者たちの補償要求運動

日本に帰還した抑留体験者はどうしたか。家に帰って、まず仕事を見つけることが最優先、生活基盤を確立することが一番大事でした。しかも帰国直後はとくに社会的に白い目で見られたので、抑留体験を話す人は少なく、むしろ封じ込めて、多くの方の場合、自分たちが受けた体験の意味について深く考える余裕はあまりなかった。

ところが 1960 年代から 70 年代になって、当時、北の海では日本の漁船がソ連によく拿捕されました。韓国との間でも「李承晩ライン」を越えた漁船が韓国の警備隊に度々捕まっていました。それに対して日本政府は、漁民への補償を、拿捕されて抑留された日数に応じて行いました。ニュースでこれを聞いた抑留体験者たちが「え～？」という話になったわけです。

つまり、自分たちはシベリアへ望んで行ったのではない。国の命令に従って旧満洲や北朝鮮にいたところを捕虜になって連れて行かれて、そしてただ働きをさせられて帰ってきた。この「ただ働き」については少し注釈が必要です。実は多少現地で給料をもらった人もいます。きつい仕事でノルマを達成した場合は報奨金が出た場合もあります。もちろん全部ソ連の通貨ルーブルです。しかし、ルーブルはソ連から持ち出すことができなかった。アメリカは労働証明書を出してくれたのですが、ソ連は紙類の持ち出しは一切禁止で、帰国時に

証明書を発行してくれなかった。そうすると全く給料をもらわずにただ働きで帰ってきた人がほとんどだったわけです。

ところが、漁民の人たちは、自分の意思でビジネスのために出かけて行って、拿捕されて、抑留されて、それに対して日本政府が一日いくらというお金を支払う。そうであれば、ソ連に抑留された自分たちに対しても当然これは支払われるべきではないか、ということによりやく気がついたのです。最初は九州の大分の人たちが動き出したのですが、1970 年代の後半からそういう動きが出てきます。

全国抑留者補償協議会の結成と国家補償裁判

1979 年 5 月に「全国抑留者補償協議会」(全抑協)という団体が結成されて、国に対して補償を求める運動を始めます。全抑協は最大時には約 14 万人の抑留体験者を組織したと言われています。その中心的人物が山形県鶴岡市の斎藤六郎さんと、大蔵省出身の自民党政治家・相沢英之さんでした。ただ、この二人は野党系と与党系ということもあって肌合いが悪く、主導権争いも絡んで団体が分裂します。一方は「斎藤派」、もう一方は「相沢派」と言われ、斎藤六郎さんを中心とする全抑協は、63 名の元抑留者を原告団に立てて 1981 年 4 月に国家補償を求める裁判を起こします。

国家補償という考え方ですが、日本人捕虜を働かせたのはソ連なので本来はソ連が労働賃金を払うべきですが、日本政府の立場としては 1956 年の日ソ共同宣言で請求権を相互放棄しています。国としてはソ連に請求できない。ところがジュネーブ条約は、抑留中の労賃は、捕虜を使役した国が捕虜を送り出した国のどちらかが払うということになっている。したがって、ソ連が払わないなら日本政府が払うべきというのが抑留体験者たちの考え方、それで日本政府に国家補償を求める裁判になったわけです。

与党系の人たちは「国を相手に裁判を起こして楯突くのはとんでもない」ということで対立します。さらに長期抑留者、戦犯とされて最後まで抑留されていた人たち、そのほとんどは将校や満鉄調査部などの出身で、陸軍士官学校や東京外国語大学を出たエリートでしたが、この人たちはまた別のグループを作って、抑留者団体は大きく 3 つのグループに分かれて活動していました。旧将校グループは当然与党系ですが、三者の動きがそれぞれ違っていたため、そのことがこの問題の政治的な解決を遅らせた原因の一つだと思います。

国家補償を求める裁判は 1981 年に始まり、最終的に最高裁の判決が出たのは 1997 年です。16 年間 — 地裁で 8 年、高裁と最高裁で 4 年ずつと、日本の戦後補償裁判史上最長でしたが、結局、全部棄却されました。棄却の理由は、いわゆる「受忍論」です。東京・大阪大空襲の被害者の国家補償請求裁判でも同じでしたが、戦争中に起きたことは、これはいわば国家の存亡にかかわる非常事態なので、国民一人一人が我慢すべし、受忍すべきことだという考え方で、したがって

国家補償は認められないという結論を裁判所は下しました。

国の対策～「慰藉事業」

しかし、この国家補償裁判が始まると、国側もさすがに「何もしないのはマズイ」と考えたんですね。総務庁長官の私的諮問機関「戦後処理問題懇談会」が、当時の経団連会長を座長に 1982 年 6 月に発足して検討を始めます。こういう有識者懇談会というのは、実は官僚がシナリオを全部書いていて、後になってメモや議事録が出てくるのですが、国側は、抑留被害者や戦争被害者に国家補償するとなると、戦後処理全体の根幹が崩れる、「パンドラの箱」が開いてしまうので断固阻止すべしと考えます。これは 2010 年に NHK が外務省の資料を情報公開させて分かったのですけれども、「パンドラの箱を開けないように」という言葉がしっかりメモに書いてありました。

ということで、官僚たちが最初から結論ありきで始めた懇談会だったのですが、2 年半後の 1984 年 12 月にその答申が出ます。答申の内容は、「国家補償はしない」「それに代わる『慰藉事業』を行う」というもので、「平和祈念事業特別基金」という政府基金が 1988 年 7 月に設立されて、「補償」ではなく「慰労」と「慰霊」事業が開始されます。この事業は、いわゆる相沢派グループを政府が取り込んで、国が基金(5 億円)を出して「財団法人全国強制抑留者協会」を設立し、そこにさらに毎年数千万円の補助金を支援して行っているもので、つまり政府系の抑留者団体には資金援助をしますという非常に露骨な対応でもありました。

エリツィン大統領の謝罪表明

他方、1980 年代後半にはソ連でペレストロイカが進み、ゴルバチョフ大統領が 1991 年 4 月に来日して、約 3 万 7 千人の抑留死亡者名簿を初めて日本側に引き渡します。ここから死亡者名簿の解明が始まります。

この時、同時に「日ソ捕虜・収容所協定」(捕虜収容所に収容されていた者に関する日本国政府とソヴィエト社会主義共和国連邦政府との間の協定)が調印されました。この協定に基づいて、日本側の遺骨収集団の受入れや、ソ連側資料の提供などが正式に決まり、ようやくシベリア抑留の真相究明が本格的に始まったわけです。

その後、1993 年 10 月細川内閣の時に、ゴルバチョフの後を継いだエリツィン・ロシア大統領が来日し、首脳会談で、さらに国会と宮中晩餐会でも、シベリア抑留について謝罪をします。「ロシア連邦共和国大統領の名において、深甚なる謝罪の意を表明します」という大変明快な謝罪でした。

が、ロシア側の外交的な対応は、残念ながらそこで終わっています。プーチン大統領に代わった後は、小泉首相までは首脳会談でシベリア抑留について言及していましたが、安倍首相は 27 回も首脳会談をやっているが、シベリア抑留に

については一言も持ち出していません。

裁判の棄却を受けて立法運動を開始

1997 年に国家補償裁判が最終的に棄却された後の話にもどると、国はもともとやる気がないし、裁判所も認めてくれないとなると、残された道は、立法府で法律を作って補償を実現するしかないということになりました。全国抑留者補償協議会の本部は、斎藤六郎さんの地元、山形県鶴岡市にあったのですが、2003 年にその事務局を東京に移して、ここから本格的な立法運動が開始されました。

私もこの頃から運動に加わったのですが、とにかく国会に法律案を出そうということで、民主党の政治家で後に厚生労働大臣をやった長妻昭衆議院議員が中心になって「戦後強制抑留者特別給付金支給法案」という法案を作り、2004 年 6 月に提出しました。これは名前の通り「給付金を出します」というだけの法案だったのですが、2006 年に衆議院と参議院で計 11 時間議論はしたものの、自民党と公明党の反対で否決され、廃案になってしまいました。

「もうこれは難しいんじゃないか」という話になりかけたのですが、否決されたのが 2006 年の 12 月です。2006 年 12 月というのは、ちょうど舞鶴港に最後の引揚船が帰ってきてから 50 年でした。12 月 26 日に舞鶴で「抑留犠牲者追悼の集い」を開催したのですが、参加した約 50 人の抑留体験者たちが、「国会でこの法案を否決するなんてとんでもない!」と次々抗議の声を上げて、追悼の集いが総決起集会になってしまって、「もう 1 回立法をめざすべきだ」という話になったのです。そこでもう一度法案を練り直して、今度は「特別措置法案」を作りました。

2010 年 6 月「シベリア特措法」成立

前の法案とどこが変わったかということ、特別給付金法案は存命中の抑留被害者に対して、その抑留期間に応じて 35 万円から 150 万円の給付金を支給するという法案でした。これが否決されると、「国会議員を含めてやっぱりこの問題が分かってないんじゃないか」という話になって、前の法案の特別給付金の部分に加えて、シベリア抑留の調査・実態解明を行い、次の世代に引き継ぐ事業を行うという内容を入れて、二本立てにしたのです。

おそらく特別給付金法案が成立していたら、お金を払ってそれでおしまいという手切れ金のようなことになっていた。それでは意味がない。この問題をきちんと調査して次の世代に伝えていくということで、法案としては一度否決されて結果的によい内容になったと思います。

野党が作成したこの法案がまさか成立するとは思ってなかったんですが、ご存知の通り 2009 年に政権交代がありまして、2010 年の 6 月に自民・公明も賛成して全会派の賛成で「シベリア特措法」（戦後強制抑留者特別措置法）が議員立法

で制定されました。

この特別措置法の制定に中心的役割を担った全国抑留者補償協議会は、最後は私が事務局長をやっていたのですが、その時点で平均年齢が 87 歳でしたから、この法案の成立を区切りにして翌 2011 年 5 月に解散します。解散後に何も無くなったのでは困るということで、シベリア抑留者支援・記録センター（正式名称；ソ連による日本人捕虜・抑留被害者支援・記録センター）を立ち上げました。それまでは当事者の団体だったのですが、抑留被害者だけでなく、遺族や研究者、ジャーナリスト、関心のある市民の方々を含めた団体として発足しました。

シベリア特措法の成果と残された課題

特措法で支給された金額は、法律が成立した 2010 年 6 月 16 日の時点で生存していた人に対して、抑留期間に応じて 25 万円から 150 万円です。平均すると一人 28 万円。非常に少ない。本当に一桁少ないと思うのですが、総額 192 億円で受け取った人の数は 6 万 9 千人でした。金額は少ないですけども、抑留被害者の皆さんはそれぞれ納得して受け入れてくれました。

給付金とともに特措法で大事なことは、シベリア抑留の実態解明、慰霊事業、次の世代への継承事業を国の責任でやるのが法律に盛り込まれたことです。実態調査については翌年閣議決定された方針が以後ずっと継続して実施されています。時限はありません。

問題点としては、特別給付金の支給対象は生存者のみなので、約 7 万人弱にしか支給されていないということ。さらに対象者は日本国籍所有者とされて、韓国・台湾など旧植民地出身者は除かれました。地域的な区分で言うと、同じように苦労された旧満洲・北朝鮮、樺太・南千島などの抑留者も除外されています。遺族の場合、現地で亡くなった人については遺族年金が出ているのですが、帰国後に亡くなった人は除外されているわけです。これらの点が課題として現在も残っています。

遅々として進まない実態解明と遺骨収集

もう一つの問題は、やはり実態解明があまり進んでいないということです。死者の数を、厚生省は 5 万 5 千人と言っていますが、実際には 6 万人を超えています。死亡日・埋葬地が特定されているのは 4 万 832 人のみで(2023 年 3 月現在)、1 万 5 千人以上が死亡日や埋葬地が確認されていません。回収された遺骨はやっと 2 万柱を超えた程度です。遺骨の中には名前が分からない人も多く、2 万柱のうち 1 万 7 千柱が、無名戦士の墓である千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納められていて、実際に遺族に返されたのは 3 千柱くらいです。

コロナ前の 2019 年の時点で、まだ 4 万柱分が現地に残っていたわけです。コロナで遺骨収集が止まってしまい、さら

にウクライナ戦争で当分できない状況が続きます。コロナ前の遺骨回収ペースは年間 200 柱程度でした。そうすると、あと残りが 4 万柱としてまだ 200 年もかかる。これを一体どうするのかという深刻な問題があります。

さらに、厚労省の遺骨収集事業の信頼を根底から揺るがす事態が 2019 年に NHK のスクープで発覚しました。14 年前に東シベリアで収集した遺骨が日本人のものではないという DNA 鑑定が出ていたにもかかわらず、厚労省は報道があるまでそれを隠して、ロシア側にも伝えていなかったのです。結局、その後の調査で厚労省は「1999～2014 年にロシア国内 9 カ所で収集した遺骨のうち計 597 人分が日本人のものではない可能性がある」と発表しました。これは遺骨収集の「成果」を上げるために、事情をある程度分かっていた上で担当者がやったことなのでしょうが、虚偽を重ねた許されない行為でした。その間違っただけで持ってきた遺骨もまだロシアに返してないのです。今も厚労省の建物の中に置いたままです。メディアもその時は大騒ぎをするんですが、後始末までフォローしないので、放ったらかしになっています。

シベリア抑留の文化面での遺産と影響

シベリア抑留というと暗い深刻な話ばかりですが、少し別の方角から見てみると、シベリア抑留は戦後の日本の文化にもいろいろな影響を与えています。

つまり、60 万人の日本人がシベリア・ソ連に初めて行って、異文化体験をしたわけです。極東とはいえ、ウラジオストクもハバロフスクも街並みヨーロッパですよ。もちろん共産主義・社会主義の問題もありますが、明らかに日本とは大きく異なる社会に放り込まれて、それがどういう影響を与えたか。抑留体験者の中には、文学者や思想家、音楽家、芸術家など、いろいろな才能を持った人がいて、帰国後、さまざまな分野で活動しました。

名前を挙げると、文学では、作家・評論家の高杉一郎、内村剛介、胡桃沢耕史、長谷川四郎、詩人の石原吉郎。文化人類学者として活躍した加藤九祚。音楽では、歌手の三波春夫、青木光一、作曲家の吉田正、NHK 交響楽団のコンサートマスター黒柳守綱、といった名前が挙げられます。兵庫県高砂市在住で今も元気にアコーディオンを弾いている田中唯介さんという方もいます。

いわゆるロシア民謡、「トロイカ」「カチューシャ」「一週間」といった曲は、みんな抑留者が戦後持ち帰った曲です。音楽の教科書などに載っている歌詞（日本語訳）には抑留者たちの訳がそのまま残っています。ダークダックスやボニー・ジャックスなどがよく歌い、歌声運動でも歌い継がれてきましたので、戦後の日本の音楽シーンにかなり大きな影響を与えた時期がありました。

美術の分野では、画家の香月泰男、佐藤清、吉田勇、宮崎進、宮崎静夫、四國五郎、彫刻家の佐藤忠良といった方々が

抑留中の記憶を多くの画集に残しています。今日は会場に四國五郎氏の子息の四國光さんがお見えですが、四國五郎さんは広島絵本『おこりじぞう』（山口勇子文、金の星社、1979 年）の絵で有名です。四國五郎さんは原爆で弟さんを亡くし、自身は当時満洲にいて、その後シベリアに抑留されました。現地で隠れて記したメモを密かに持ち帰り、それをもとに帰国後シベリア抑留中の絵日記やスケッチなど、たくさんの作品を残しています。

実はシベリア抑留の過酷な実相が分かる写真は一枚も無いのです。ソ連側が撮った写真はあります。しかし、それらは、捕虜虐待への批判をかわすために、逆のプロパガンダとして発信するために撮った写真で、「きちんと食事を与えます」とか「元気に体操やっています」「学習活動やっています」といったものばかりで、それらを見ると抑留体験者の話と全く違うシーンが撮られている。そういうことで、残念なことに正確に状況を写した写真は全然ないのですが、帰国した抑留体験者がそれぞれの記憶をもとにたくさんの絵やメモを残しており、時々展示会などが行われますので、機会があれば是非ご覧いただきたいと思います。

抑留研究の進化と次世代への継承

この 10 年ほどで、遅れていたシベリア抑留研究もかなり進化してきました。「シベリア抑留研究会」が設立され、優れた研究書も刊行されてきました。

また、四國光さんもそうですが、今度は抑留体験者の子の世代、孫の世代の方々が、いろいろな表現分野でシベリア抑留を取り上げています。

漫画家のおざわ・ゆきさんはお父さんの抑留体験をもとに『凍りの掌 シベリア抑留記』という作品を描いています。慶応大学の小熊英二教授もお父さんの聞き書きを岩波新書から出しています（『生きて帰ってきた男——ある日本兵の戦争と戦後』岩波新書、2015 年）。

窪田由佳子さんは音楽家ですが、抑留中に楽団を作って活躍した父・窪田一郎さんのことを『シベリアのバイオリン—コムソモリスク第二収容所の奇跡』（地湧社、2020 年）という本に書いています。父を極北のノリリスクで亡くされている渡辺祥子さんも『シベリアに慰霊碑を建てるまで—折り鶴よ羽ばたけ故郷に魂乗せ』（三恵社、2017 年）を著しておられます。

映画監督の久保田佳子さんはおじいさんが抑留者で、『祖父の日記帳と私のビデオノート』（2013 年）『海へ 朴さんの手紙』（2016 年）という 2 本のドキュメンタリー映画を発表し、書籍で『記憶の中のシベリア』（東洋書店新社、2017 年）も出しています。先に紹介した映画『ラーゲリより愛を込めて』で主演した二宮和也さんのおじいさんも抑留体験者です。そういった子供の世代、孫の世代の方々が歴史をきちんと伝えるために活躍してくれています。

ウクライナ軍事侵攻の衝撃

ロシアのウクライナへの軍事侵攻には大変大きなショックを私たちは受けました。直後にシベリア抑留者支援・記録センターとして緊急声明を出しましたが、シベリア抑留の歴史を教訓化して訴えても、日本国内だけではだめなんです。加害国であるソ連・ロシアの側がこの問題を歴史の事実として伝え、教訓化してくれないと、本当の意味では解決というか歴史の克服にならないわけです。ロシアに限りませんが第二次大戦の戦勝国側は、あの戦争で諸国民を解放したという正義の立場なので、その中で「負の歴史」の反省というものをなかなかやっていない。軍事力への過剰な自信というか傾斜があります。これには被害国側の発信が弱かったということも影響していると痛感します。とくに安倍政権の対ロ外交ではシベリア抑留問題は全く取り上げられておらず、非常に問題があったと思います。

国民的な記憶・歴史の継承、世界史的な教訓へ

今後の課題ですけれども、もう抑留体験者は今年で平均年齢 100 歳になります。存命の方は全国でおそらく 5 千人もいないと思います。従来の国の政策は当事者と遺家族への慰藉事業が中心でした。今後は、これをもっと国民的な記憶あるいは教訓として、どう歴史を継承していくのが大事です。日本だけではなく世界史的な教訓にしていかなければいけないのではないかと考えます。なぜこのような悲劇が起きたのか？ 防げなかったのか？ 開戦と敗戦、戦後の責任の検証が必要だと思います。

特別措置法ができてもう 13 年経ちますので、これも改正して、とくに実態解明と次世代への継承を強化しなければいけない。特措法対象外の人たちへの調査と措置を実現しなければなりません。社会啓発と研究者の養成が必要です。教科書の書き方もまだ足りません。本当はロシア側の教科書にもしっかり書いてもらわないといけないですね。

ジュネーブ条約で規定される捕虜問題というのは、残念ながら日本だけでなく、世界的にも見落とされがちです。戦争と人権侵害を防ぐために、歴史の教訓を明らかにし、全世界で共有しなければなりません。

1991 年の日ソ捕虜・収容所協定も再検討して、資料の入手、埋葬地への標識設置や墓地の保全など必要な取り決めに追加しなければいけないと思います。

こういった課題を、これからみなさんと一緒に考えながら取り組んでいきたいと思っています。

<質疑応答>

——エリツィン政権はシベリア抑留に対して謝罪しましたが、最近のプーチン政権ではどのような動きがあるのでしょうか？

有光；プーチン政権以後のロシアの対応ですが、ロシア大使館の参事官などは「この問題はエリツィンがあれだけ謝罪し

ただから、もういいじゃないですか」と言ってます。

エリツィン大統領は 1993 年に来日した時に、首脳会談、閣僚を入れた拡大首脳会談、宮中晩さん会、それに経団連との懇談会でも、全部で 6 回も謝罪表明しています。確かに当時は日本との関係をよくして経済援助が欲しかったわけですが、ところがその後はロシア側からの謝罪は基本的にないですね。

ただし、ロシア政府は 1990 年代に「スターリン時代に下された判決を全部無効にする」という形で、投獄されたり収容所に入れられたりしたソ連市民・外国人の名誉回復をしました。日本人で有期刑あるいは死刑判決を受けた人たちに対してもロシア最高検察庁の名前で「名誉回復状」を発行して、裁判結果を取り消しています。ところが今年の 1 月末に、ロシア最高検察庁が瀬島龍三氏ら 3 名の元軍人を無罪にした取扱いを停止すると記者会見で言い出しました。これはウクライナ戦争で日本がロシアの非友好国として対立していることへの報復措置のようです。

ロシアの公文書館もソ連解体後の一時期はオープンに資料を公開してくれたのですが、近年はまたクローズドで情報が入手しにくくなっています。データベースがインターネット上に一部開示されたりはしていますが、シベリア抑留問題をロシア側が積極的に協力して解明するという方向にはなっていません。

政治的な姿勢としては、プーチン政権がこの問題にきちんと向き合うというのは残念ながら考えられないですね。

——旧満州には日本の民間人も結構いたわけですが、民間人で抑留されたという事例どれくらいありますか？

有光；民間人の抑留者が全体で何パーセントあったかという数字データはありませんが、民間人も相当連れていかれています。例えば、通訳、満鉄の社員、鉄道技術者です。接収した機関車を動かすためですね。満州にあった新聞社の日本語の活版や印刷機をそっくりハバロフスクへ持って行って「日本新聞」という新聞を発行していますから、活字を拾う職工さんなどもそうです。女性でも看護婦さんやタイピストなどの民間人が抑留されています。

——抑留問題は右翼が利用して、ロシア領事館の前で黒い車を並べて大音声で連呼していますけれども、そういう右翼の動きと抑留者あるいは抑留者団体はどのような距離を取られているのか教えてください。

有光；右翼の人たちは毎月 1 回「反ロシアデー」とか言って、ロシア大使館に街宣車で押しかけて「異国の丘」を流したり、北方領土と並んでシベリア抑留のことを叫んではいるのですが…、抑留犠牲者の追悼をやっているようには見えない。

私たちは毎年 8 月 23 日に千鳥ヶ淵で追悼集会をやっているのですが、右翼の人はシベリア抑留のことをどう思っているのでしょうか、来てくれたためしがありません。

抑留犠牲者 6 万人というのは大変な数です。朝鮮戦争、ベ

トナム戦争で亡くなった米軍の死者よりもはるかに多い。それだけの犠牲を出しているながら、あまりにも日本社会は冷たいなという感じがします。

毎年 8 月になると御巣鷹山に日航機が墜落し 520 人が亡くなった事件の追悼報道が新聞に出ます。その記事よりも、私たちが 8 月 23 日にやるシベリア抑留犠牲者追悼式の記事ははるかに小さく扱われる。一応、各社とも追悼式の記事は載せてくれるのですが、6 万人も亡くなっている、本当にこんな扱いでいいのかなという感じがします。

——ロシアの一般国民はこのシベリア抑留についてどれだけ理解しているのでしょうか？ ロシア国民に対する啓蒙活動は今までできてきたのかどうかお聞きします。

有光：世代によって違うと思いますが、もうロシアの若い人たちはほとんど知らないです。ロシア側では基本的に教えられていないと思います。

ただ、子供の頃に家族が収容所で働いていたとか、収容所の近くに住んでいたという年輩のロシア人はいます。以前、NHK の番組でシベリア鉄道の特集があって、チタの近くの高校の先生がシベリア抑留について生徒たちに教えて、毎年夏になると森の中へ入って収容所の跡地を巡り、遺品を集めたりする活動をしている場面がありました。そういうことをやってくれている人がいるにはいるようですが、でもそれは本当に少ないと思います。

日本政府がやっているのは基本的に政府間のやり取りに終始していて、例えばロシアの地方紙や地方の放送局などと協力して「日本人のシベリア抑留を覚えている人はいませんか？」と呼びかければ、もっといろいろな反応があると思うのですが、そういう働きかけは残念ながらやっていません。モスクワの中央政府だけでなく、地方政府とか地方の民間ネットワークをもっと活用すれば、ロシア側ももう少し気づいてくれることがあると思います。これはウクライナ戦争が終わった後でないと無理ですが、今後は是非そういう働きかけをしたいと思います。

映画『ラーゲリより愛を込めて』も、本当は日本だけでなくロシアでも上映した方がいいと思うのですが、描き方がロシア側にとって一面的で否定的な場面が多くあります。実際には日本人抑留者と現地のロシア人との交流も当然あったのですが、そのあたりが全然描かれてないので、このまま輸出して上映するのは難しいかなと思います。

(2023 年 2 月 12 日、大阪日ロ協会定期総会での講演)

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

30 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 30 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,000 名以上にのびます。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様にバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学 9 月生・募集中



オンライン
相談 受付中!

期間：2023 年 9 月 1 日より 10 ヶ月

締切：2023 年 6 月 9 日

モスクワ国立大学 860,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

サンクトペテルブルグ国立大学 1,018,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ゲルツェン教育大学 937,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ウラジオストク極東連邦大学 418,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

ミンスク国立言語大学 422,000 円(授業料 10 ヶ月)/予価

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金
および取得手数料などがかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)

◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

◆◆編集後記◆◆

▼ウクライナ戦争は開戦 13 か月が過ぎた今も停戦の兆しが見えません。本号では、「ウクライナ戦争下のロシアビジネス、ロシア交流」のミニ特集を組み、新潟でロシア雑貨販売を手掛けるツバサ交易の白井健一さん、ロシア極東連邦総合大学函館校の大渡涼子さんに寄稿していただき、また JIC 旅行センターからも「日ロ人的交流の現状」を報告しました。▼シベリア抑留問題についての有光健さんの講演録は、この問題の全体像が非常によくわかる格好の解説文になっています。併せてお読みください。▼まだ困難な日々が続きますが、JIC は何とか旅行・留学事業を継続し、日ロ交流の一翼を担い続ける決意です。(F)